

英太郎 (沈黙。) 言つてもいいのか。

とし子 はい。

英太郎 (月明りにとし子の顔を見る。卒塔婆の前にある石の上に腰を懸ける。) 俺は死ぬ氣だ。

とし子 ……

英太郎 お前に黙つて死なうか、どうしようかと迷つてゐた。

とし子 (懐から短刀を出し英太郎に示す。)

英太郎 (沈黙。) すまなかつた。

とし子 乃木さんたちのやうに……

英太郎 うむ。

とし子 その前に申し上げて置かなければなりません。弘は陰謀に加はりました。××事件です。

英太郎 (目をつむる。) さうか。

とし子 わたしはもう何も悲しい事は御座いません。

英太郎 業縁だ。

とし子 何も恨みません。

英太郎 (うなづく。) 二人が一つの石にならう。(短刀を抜く。)

とし子 (うなづき手を合せる。)

(大都會の曉の最初の動きをつたへる汽笛が遠くで聞える。)

—幕—

(一九二五・八・三〇)



よき父の嘘

——此作を父上にさしぐ



父	長	次	末	牧	實	處。	地方の豪家。
女。	女。	女。	女。	師。	商。		
六	二	二	十				
十	十	十	九				
歳。	五	三	歳。				
	歳。	歳。					



幕開くと父ベッドに寝て居る。起き上る。

父 あゝ夢だつたのか。(考へる。) 貴い夢を恵まれた。 わしはいよく召されるのだな。 わしは死ぬのが楽しい。此の世が苦しかつたからではない。 わしは幸福に暮らして来た。此の世は本當に楽しかつた。あの世もきつと楽しいだらう。神様を信じて正直に暮らす者には、生も死ぬも楽しい筈だからな。だが待てよ。 わしは本當に正直に暮らして来ただらうか。(考へる。) たつた一つ、たつた一つだけわしは嘘を吐いて居る。 わしが一番愛して居る娘達に。 わしは正直者だと云はれて来たが、此の事を今迄悪いと思つた事がないのは不思議だわい。しかしやつぱり嘘には違ひないな。ふむ。だが長い間約束を繰り返へして来て、今更ら取り消す事も出来ないからな。 わしは娘達がみんな可愛いのだから。

(寶石商登場)

商人 おあつらへものを持つて参りました。

父 (函をうけ取つて) 出来ましたか。

商人 苦心して拵へました。

父 (函を開く。)

商人 如何です。どれが本當の指環だか見分けがつかますか。

父 ふむ。つかない。よく出来たものだ。

商人 どれも極上等の蛋白石で一番細かい細工がしてありますからな。

父 ありがたう。

商人 御意に召しまして嬉しう御座います。如何でゐらつしやいますか、御氣分は。

父 大變よろしい——それ以上です。

商人 結構で御座います。お大事になさいます。私はまた暫らく旅を致します。

父 (考へながら) 旅に出る……のだな。ふむ。



商人 はい。仕入れのために——沙漠のある地方へ、當分お目にかゝれません。御機嫌よう。

父 御機嫌よう。お互にな。(間。) いや旅はいゝものだ。淋しくはあるが。

商人 いゝもので御座いますな、まつたく。見知らぬ山や川や、長らくあくがれてゐた國のありさまを目のあたり見られる……

父 それだよ。長らくあくがれてゐた國をな。

商人 いや、色々な珍しいものを見ますよ。思ひもかけぬ砂丘の陰から、目のさめるやうな孔雀が飛び立つたり、川の多い地方ではさまざまの色の蓮の花や——とりわけ南の國では頭の上で數知れぬ小鳥の聲が——

父 (夢見るやうに) わしは特別好きでな。その羽のある類のものが——輕ろい、めぐまれた被造物つくられものといふ氣がして。

商人 めぐまれた被造物つくられものと申しますと、お家のお嬢さま方を思ひますな。

父 (まじめに) 本當にさうお思ひかな。

商人 まつたくで御座いますよ。いやどうも、私はお嬢さま方を見ますとうれしくなつてしまひましてな。いつもやさしいお言葉をかけていたゞきまして。殊に無邪氣な御様子でからかつたりなどされますと、私はまつたくお寺で坊様方から祝福されるのと同じやうに……

父 (涙ぐむ) もうよろしい。お前さんは何よりいゝ挨拶でわしを祝福しておくれたつた。もつたはなくはあるが……いや、お前さんはずつと長い間いつもわしを——わしはお前さんに何かお禮をしたいのだが……

商人 滅相な。いや、ではお願ひ致しませう。

父 あゝ。何でもな——永く残るやうなものを。

商人 永く残るやうなものを? はい——私の稼業の名譽として一生残りますよ。お嬢様方の御祝言の時の御身の飾りのことをどうか私におほせつけ下さいませ。

父 それがお前さんの願ひか。しかとたのみましたぞ。お前さんの寡欲と正直とがお前さんの店頭にいやが上に客を集めますやうに!



商人 ありがたう御座います。では御機嫌よう。

父 御機嫌よう。

(寶石商退場。)

父 (目をとぢる。やがて寶石の函を開く。) 此の三つの指環を並べて見て居ると、可愛い三人の娘を見てゐるやうな気がする。さうだ。娘達はわしにとつては三つの球だ。どれも美しくどれも尊い。一つを選べと云ふのは無理だ。いよく娘達にも別れなければならぬ。さすがに残り惜しい気はするが、わしは悲しいとは思はない。今度は眩いやうな處で逢へるのだから。それにあれの爲に席を備へに行くのだから。其處でおふくろが待つて居て呉れるだろうが、あれ位揃ひも揃つて美しく育てあげてあれば、自慢して話しが出来ると云ふものだ。だが思へばおふくろが懐しいなあ。

(教會の鐘が鳴る。)

父 時が来た。娘たちに左様ならを云はなくては。だがわしは死際はあれらに見せまい。悲

しい思ひ出を残すのは可哀相だ。あれ等がわしを見つけた時にはすや／＼と眠るやうな顔をして死んで居たい。

(長女登場。盆に牛乳をのせて持つて来る。)

長女 御乳を御あがり遊ばせ。

父 (一寸唇をつけて) ありがたう。

長女 如何でゐらつしやいますか。何か御召し上りになり度いものがございましたら、どうぞ。

父 (凝つと娘の顔を見る。) お前はいつも甲斐々々しいな。わしはお前のお母さんが居なくなつてからは、お前の獻立でいつもおいしく喰つて来たのだな。それにお前が毎日精出して織る機は――

長女 (さへぎつて) いやでございますよ。お父様。私は好きで働くのですもの。それに私御父様の爲ならどんな事でもしてお上げ申さなくては。私は御父様に一番愛されて居る娘なんですもの。ねえ、さうでムいしましたね。お父様。



父 うむ。その通りだ。わしはお前程可愛いものはない。(額に接吻する。)

長女 では一番お父様が私を愛してゐて下さると云ふ證を見せて下さいませ。

父 といふのは？

長女 お父様は御存じの癖に。

父 約束の品をくれと云ふのだな。

長女 はい。あの指環を。

父 うむ。(間。)よし。(一つの函を開き指環を出し)手をお出し。(娘手をさし出す。)これは

古い家の名譽と祭祀まつりとを嗣ついでぐものの印ぢや。

長女 (跪いて)有りがたうムいます。お父様。

父 それでよい。お前は立派な夫人になつて、よく家を修めるだらう。

長女 家の名を辱しめたくないと思つてゐます。

(間。)

父 (娘の顔を見る。)亡くなつたお母様によく似てゐる。お前お母様を覚えておいでだらうな。

長女 はい。よろしく。

父 なつかしいと思ふかい。

長女 ええ。

父 逢へたら嬉しいと思ふだらうな。

長女 それはもう。だけどお父様は今夜に限つてどうしてそんな事を……

父 なにさつきお母さんと逢へた夢を見たのでな。お前お父さんがいつもあんな夢を見つゞけられたら、幸福だと思ひだらうな。

長女 無論思ひますわ。

父 うむ。(間。)娘。

長女 はい。

父 もつと側へ寄つて顔を見せておくれ。



長女 はい。(側へ寄る。)

父 (沁々と見る。) もうよし。ではあちらに行つて。

長女 機を織りかけてゐますから。(退場。)

父 (黙禱する。)

次女 (乗馬服を着て登場。) お父様。今晚は。

父 あい。

次女 これから出掛けようと思ふのですが、一寸お父様のお顔が見度くて。

父 また馬かい。

次女 あまり月がいくので裾野を一まはり乗つて来ようかと思ひますの。

父 それはいゝなあ。だがあまり飛びまはつて怪我をしないやうに。

次女 (笑ひ乍ら) 乗り手が違ひますわ。

父 うむ、お前は立派な乗り手だからなあ。お前はあの荒馬を馭すやうにどんな亭主でも馭

すだらう。

次女 いやなお父様。

父 だが今度は愛の手綱でな。お前は一方又なか／＼外交家だからな。お前は小さい時から

おはねで、運動好きで、そして伶俐だつた。

次女 お父様は私のやうに御轉婆は御嫌ひでういませう。

父 いや大違ひ。お前は男まさりで勝氣なくせに、又馬鹿に涙もろいからな。處でお前が花嫁になるのはいつのことだかな。

次女 (首を垂れる。)

父 お前婚禮の時にはあの寶石屋のぢいさんにやらせるのだぞ。身の飾り一切――

次女 おもしろいぢいやさん。いつもからかつてやりますの。

父 (沁々と見る。) かつぎを被つて、灯に守られたお前は嘸美しいだらう。……わしは見た  
い――(首を振る。) いや／＼、何ごともみこゝろだ。



次女 お父様、私何だか悲しくて――

父 悲しいことはない。ねえ。お前は覚えておいでかい。わしがお前たち三人をつれて宮参りの旅をしたことがあつたつけね。

次女 ええ。よく覚えてゐますわ。

父 あの時は楽しかつた。先づ、詣つたお宮の神々しさ、私たちは、お苑（庭）のすぐ下を流れてゐるきれいな川で口や手をそぐいで、廣前で司教様から祝福を受けた。歸りに橋の上からお前たち三人が争つて川の中の乞食に施しの金を投げてやつた。

次女 それから方々の街や名所を見て廻りました。街では名物の美しい人形を買ひました。

父 お前たちはよく歩いた。宿でお前たち三人が髪を結ふ時に喧嘩をしてお前が泣いた――

次女 でもすぐに仲直りして出かけたんですわ。下には湖水へ行く馬車が待つて居たんですもの。

父 それからお母さんへのお土産を選んで、オーうと故郷へかへる船で――さうだつたね。

（間。）あの旅をしたのはよかつた。わしはお前たち三人と一緒に考へるときにはいつでもあの旅のことをおもふ――

次女 （少し不安さうに）お父様は私が一番可愛いといつかおつしやいましたね。

父 あゝ。

次女 あれは本當でございますか。

父 （考へて）本當だ。

次女 そして一番愛されてゐるものが家を嗣ぐのでございますね。

父 それが本當だと思ふ。

次女 ではよつぎの證になるものを私に下さいませ。御約束のやうに。

父 うむ。だが一寸待てよ。えーと。（考へる。）

次女 基督者は約束を違へてはいけなので御座いましたね。

父 それだて。基督者は嘘をついてはいけない……のだからなあ。



次女 ではお約束のものを下さいまし。

父 お前は理づめだなあ。ふむ。だがお前が理窟を言ふ時がわしは可愛いのだて。お前の顔を見てゐるとやつぱりお前はわしの一番可愛い者だ。それに違ひはない。(決心したやうに)よし。(指環の函をあける) 手をお出し。(娘手を差し出す。父指環をはめてやり乍ら) これはわしが最愛の者、わしの世嗣ぎたる者のしるしぢや。

次女 (跪いて) ありがたう御座います。お父様。

父 だが娘。一つ言つて置かねばならない。此の指環を持つ者は神と人にと快きものとならねばならないと云ふ事が尊い先祖から云ひ傳へられて居るのだ。それでわしもさう云ふ者として一生涯暮さうと今日迄努めて來たのだ。お前は此の指環をもらふからには、さう云ふ者にきつとなつてお呉れだらうな。

次女 私は神と人にと快い者ときつとなります。

父 それでよい。では行つておいで。(娘の額に接吻する。涙ぐむ。) きげんよくね。

次女 はい。御父様。どうか遊ばしたのでムいますか。もしか御気分が悪いのでは。

父 いや、わしは幸福だ。此の上もなく幸福だ。

次女 では行つて参ります。(元氣よく退場。)

父 (沈黙。) 神様。僕を御赦し下さいませうか。

末女 (二つ折りの紙を持つて登場。) 御父様。如何でムいます。

父 気分はいゝ。静かな。湖のやうに静かな氣持だ。

末女 (凝つと父の顔を見て沈黙。)

父 御前は可愛い。お前は無口でおとなしいから。御前とむき合つて凝つとして居るとわしの心が幸福になる。お前の愛が潮のやうにひたくと湛へてわしの魂に寄り添うて來る氣がする。殊に今夜のやうな夜にはな。

末女 御父様。今夜は何んだかお淋しさうでムいますのね。

父 人間は幸福すぎる時には淋しいことがあるものだよ。ねえ娘。こんな時にはお前の詩



がきかせてもらひたいね。何かかう魂の底に徹しむやうな――

末女 御父様。私今日一日詩を作つて居ましたの。

父 出来たのかい。讀んできかせておくれ。

末女 (讀む。)

日はくれて 山はしづもり

みづうみに 星のうつれば

岸のへに 舟ももやひぬ

向つ尾に ともる灯かげの

しみとほる 寒き色はも

父 いゝな。静かで深い。それから――

末女 わがともよ 我れに寄りきや

かゝる夜に 獨りあらんや

もろともに 愛のこと葉

もゝちたび むねの底ひに

死をこめて 貫きぞ交はさむ

誓ひてよ……

父 なか／＼いゝ。お前は豊かな才を恵まれて居る。末頼もしい。お前は氏の名を上げて呉れるだらう。

末女 私は名譽のあるうちの世嗣なんでムいますから。氏の名を上げる事は出来なくても辱かしめない丈けにはしたうムいます。

父 世嗣だつて。

末女 はい。私はお父様の一番可愛い者でそして、世嗣で――

父 うむ。(考へる。)

末女 (少し淋しそうに) 私はいつもさう信じて居ます。お父様がさう仰つしやいました時から。



信じてゐてもいゝのでムいませう。

父 うむ。わしはかうしてお前を見て居ると、お前の心が一番わしの心にぴつたりとする。

わしはお前が世の中で一番可愛い。それは本當だ。

末女 (口ごもり乍ら) 私御願ひしてもいゝのか知ら。

父 なんでも言ふがいゝ。

末女 (決心したやうに) 御父様、私は戴きたいのです。御父様の愛のしるしが、世嗣の證が。

父 (沈黙。) よし。(函を開いて) 手をお出し。(娘手を差し出す。指環をはめてやり乍ら) これ

は最愛のもの、我が世嗣、神と人とに快よきものたる證ぢや。

末女 (跪いて) 有難う御座います。御父様。(沈黙。)

父 これでよい。ではあちらに行つて。

末女 私今夜はお父様のお側で寝んではいけませんの。

父 いや。今夜はわし一人で寝<sup>やす</sup>みたい。そして神様に御祈りしたい。餘り心が幸福な時に

は、年寄りと言ふものは、一人でゐて、神様に話しかけてゐたくなるものだ。

末女 ではおやすみ遊ばせ。

父 ではおやすみ。(娘の額に接吻する。)

末女 (去りかける。)

父 それからなあ。牧師さん呼びにやつてくれないか。眠る前に一寸顔が見たくなつた。

末女 はい。(父の顔を見る。)

父 あれはわしの一番の信友だからな。考への深い、頼りになる人間だ。いゝか、何でも

心配な事や、わからない事がある時にはあの人に相談するのだぞ。ではおやすみ。

末女 (父にキッスを送り) 御やすみ遊ばせ。(退場。)

(同。)

父 可愛い娘達よ。さやうなら。(間。手を組合せ) 神様。僕は今御側へまゐります。御恵みで此の世はほんたうに幸福で御座いました。死ぬ事もまた幸福で御座います。心から感謝



致します。神様私が死ぬ間に致しました行ひは罪で御座いませうか。(間。) やつぱり嘘つきで御座います。どうぞ御許し下さいませ。私は今急に恐ろしくなりました。私の致しました愚かな行ひから娘達の間で争ひが起らねばよろしう御座いますが。あゝ神様娘達を御守り下さいませ。私の過ちの悪い果を何とぞ御救ひ下さいませ。私は一生涯正直に暮らして來たと思ひましたが、死ぬ間に此の様な事をしてしまいました。私等のする事は此の位なもので御座います。神様私は愚かなものでございます。罪人でございます。憫み許して下さいませ。でも神様私はあなたの御救ひを信じます。よきにつけ、悪しきにつけ、安心して、あなたの御手にまかせます。(間。) 娘達よ。さやうなら。

(寢床にぐつたりと打ち伏す。)

(間。)

次女 (登場。) 御父様只今。私寝る前にもう一度御父様の御顔がみたくて。

父 (答へなし。)

次女 もう御やすみになりましたか。私いゝ乗りをいたしました。御父様。(顔をのぞき込む。)

びつくりする。御父様。(ゆすぶる。)

あゝ御父様。あれ。誰かきて下さい。早く誰か。御父様が。あゝ御父様。(すがりつく。)

何だか氣になつて早く歸つたのだが——やつぱり……

(長女と末女急ぎ登場。)

次女 早く。御父様が……亡くなつて……

(長女と末女叫び聲を立て、死骸にすがりつく。)

長女 御父様。(泣く。)

末女 御父様。(泣く。)

(牧師登場。)

長女 牧師様、御父様が。

娘達 どうしたらいいでせう。

牧師 (驚くが、落ちついて) お静かに。(ベッドの側により、父の顔を見る。間。) 召されましたか。



(十字を切る。)

娘達 (泣く。)

牧師 お静かになさい。御父様は天に歸られたのです。

娘達 (尙泣く。)

牧師 今は泣いてばかり居る時ではありませんぞ。それは御父様の心に適ひません。死を悲しいものと思ふ事を御父様はお好みになりませんでした。御覽なさい。此の平和な顔を。此の顔は悲しみ以上です。死以上です。私はこんな平和な死に顔を見たことはない。私は顔を見た時に涙が出なかつた。そこには悲しみと云ふよりも恵まれた美が輝いてゐるからです。これは神様にまかせ切つた幼な兒の顔です。皆さん泣くことを止めて、御父様の魂の天に歸つた夜を静かに祝して、守りませう。

(沈黙。)

牧師 あなた方は御父様の寢床を淨めて、飾つて下さい。私は召し使ひ達に主人の死を報せ、

村の親しい人達に訃音をつたへ、葬ひの打ち合せをいたしませう。すぐに歸ります。

(牧師退場。)

(娘達寢床をつくるひ、父の顔に布をかけ、花を飾り、十字架を立てる。)

(間。)

長女 (焼香し手を合せ) お父様、あなたの世嗣のもの今捧げまする香華を御受け下さいませ。

(退く。)

次女 (同じく焼香し) お父様あなたの最愛のもの捧げまする供養を御受け下さいませ。(退く。)

末女 (同じく焼香し) 一番可愛いがつて下さいました小さいもの捧げます心からの回向を御受け下さいませ。(退く。)

牧師 (登場。見廻して) これで宜しい。村の人達はお父さんの訃音を聞いてどんなに感動して居たでせう。お父さんを慕つて居ないものは居ませんから。明日はこれ迄かつてなかつた盛



大な葬式となるでせう。(間) 喪主を定めねばなりませんな。特別に遺言がないとすれば(長女に) 年の順であなたでせう。

長女 はい。私は名譽のある家の世嗣で御座います。

次女 牧師様に申し上げます。父は生前私を一番愛してゐると申しまして、世嗣と定めて置きました。

末女 牧師様。父は死ぬ前に私に一番可愛いから、後をつがせると約束いたしました。

牧師 はてな。

長女 そんな筈は御座いません。私の外に世嗣のあらう筈は御座いません。

次女 でも父が私に約束致しましたのは今夜のことでございます。

末女 私に約束いたしましたのはほんのさつきのことでございます。

牧師 ふむ。それは不思議だ。それには何か證據がありますか。

長女 (指環を抜いて牧師に示し) 父は最愛の者の證としてこの指環をくれました。これは先祖

から傳はつてゐる家の寶で、世嗣のしるしで御座います。

牧師 (指環を見て) 此の指環のことは生前故人からよく聞いて知つてゐます。これを御持ちの上は――

次女 牧師様御待ち下さい。私は父の約束のしるしに此の指環を戴いて居ります。(指環を差し出す。)

末女 牧師様私も此の指環をいたゞいて居ります。(指環を差し出す。)

牧師 (指環を三つ見比べて) ふむ。(考へ込む。)

長女 牧師様。嚴重に御裁き下さいませ。

次女 何より大事なことで御座いますから。

末女 父は心配な事は何でも牧師様に相談して決める様に申しましたから。

牧師 (指環を卓の上に置き、長き沈思の後) わしにはさばきが出来ない。

娘達 何故でございますか。



牧師 この三つの指環は實に同じやうに作られてゐて見分ける事が出来ない。

娘達 そんな筈はございません。

牧師 では皆さんの中誰でも見分けて御覽なさい。(三人の娘指環をのせた卓をかこみ、茫然として立つ。)

牧師 見分けがつかずまい。これは全く同じ指環だ。

長女 でも私が世嗣に相違ひいません。

次女 私が一番愛されてゐたのです。

末女 いゝえ、私の指環がほんたうです。

牧師 (手を上げて制し) お静かに。それではあなた方の御父様はうそつきだつたのでせう。

長女 (肩をそびやかし) 神様の名にかけて、父は正直な信者でした。

次女 (憤りを含み) 父は一生涯決してうそをつきませんでした。

末女 (涙ぐみ) お父さんがうそつきな位なら、私達の中二人がうそつきのの方がまだどんなに

いゝだらう。

長女 さうだ。姉妹の中二人はうそつきなのだ。

次女と末女 (同時に) 私達はうそつきではありません。

長女 牧師様、どうぞ御裁き下さい。

(間。)

牧師 (嚴肅に) 私は裁く事は出来ません。若しあなた方が私に助言がほしいのでなく、裁きがほしいのなら私は今度の司式者の役を御断りする外ありません。なぜと云つて、考へて見て下さい。死人がまた起き上らない限り、どうして眞偽を區別するでせう。それとも指環が物を云ふまで待つのでせうか。しかし助言なら出来るかも知れない。生前故人から聞いてゐたのでは、此の指環を持つ者は神と人とに快いものでなければならぬと云ふことであつた。ねえ。さうではありませんでしたか。

娘達 その通りです。



牧師 では云つて御覽なさい。あなた方の中誰が一番他の二人に愛されて居ますか。

(三人顔を見合せて沈黙。)

牧師 それが云へないとすれば、三つの指環はみな贗物でせう。さうです。お父さんの死骸の側で、争ひ合ふやうな姉妹は神様の目にも、人の目にも快くはありませんからな。

娘達 それはおひどういます。牧師様。

牧師 では私に助言を御求めなさるなら、私は敢へて申しませう。指環は三つとも本當だと思ひなさい。三人ともお父様の最愛の者だつたとお思ひなさい。そしてほんものの指環を持つてゐるのに、相應しいやうに、神と人にと快い者となるやうにつとめなさい。そしてあなた方がさう云ふ者となられた時、其の指環はほんものであると、自分も確信し、他人にも信じさせる事が出来るでせう。多分死んだお父様は、きつとあなた方三人を同じやうに愛してゐたのだ。一人を恵む爲に、二人に薄くするやうな事はしたくなかつたのだ。さあみんな公けな囚はれないお父さんの愛にあやかるやうになさい。柔和と友愛と謙遜と心からの奉仕と

を以て愛し合ひなさい。さうして、その三つの指環がめい／＼其の不思議な力を持つてあなた方の孫子の末迄傳へられた時、彼の、私などよりもつと賢い、權威のある裁き主が席について居られませう。其時こそ本當の判決が下されるでせう。

(三人首を垂れて沈黙。)

長女 (顔を上げ、決心したやうに) 牧師様。私はあなたの御助言に従ひます。

次女 (同じく) 父は私達を同じやうに愛して居てくれたのです。

末女 (同じく) 三つの指環は皆同じ愛の證です。

牧師 それは本當です。あなた方は御父様にとつてまがひもない三つの尊い寶石であつたのだ。あなた方は三人とも世嗣ぢや。最愛の者ぢや。三つの珠のやうに連なり、三つの星のやうに並んで、この家の名譽をいやが上に輝かして下さい。

(幽かなすゝり泣きの聲。教會の鐘が鳴る。)

牧師 決心が定まつたからはさあ、皆この指環を御はめなさい。御父様はさぞ満足してゐられ



ませう。御父様の魂の天に歸つた夜を通夜して、夜の明けるのを待ちませう。  
(牧師ベッドの側に行き、焼香し跪く。長女、次女、末女これにならひ、代るく焼香す。四人ベッドのまはりに跪き手をくみ合はせる——靜かに幕が下りる。)

附記。此の一篇は Nathan der Weise. 中の一寓話に據るものなり。

## 赤い靈魂

くれなゐの魂の旗たてにけり  
この條の上ぞ奥津城どころ



第一部

卷之

一



人物

博

令

家

青

N

勞働

女

金

少

教

士。

嬢。

母。

年。

子。

者。

工。

澤。

年。

A。

大學教授。

その息。

タイピストの女。

鑛業家。

その息。

後に靈魂の旗手。

金澤の私生兒。

富豪。



教授 B。  
助教 教授。  
教授 B 夫人。

時。

現代。

處。

地方の都會 F 市

### 第一場

博士の家の一室。

ヴェランダ。芝生のある庭。樹かげにベンチ。針杉の並木にくぎられてテニ

スコート（見えず）横手令嬢の部屋から石段を下りた處に櫛の木一本。五月の晴れた午後。

（令嬢、白の洋装。卓に着き、本をめくりつゝノートに書き抜きする。）

令嬢 ロセツチのは熱い。燃えるやうだ。「爾自らを報酬となしたまへ」（考へる。再びつゞける。）

深い淵のやうな魂から出る嘆き——アウグスチヌスは苦しんでゐたのだ。（又書き抜く。）だ

がテレシヤのが一番恵まれてゐる。静かな夕空のやうだ。もつと集めて見よう。

家政母 （登場。）何をやつてゐます。お研究は？

令嬢 祈りの言葉を集めてゐます。昔から今までの——

家政母 いゝお仕事です。



令嬢 いろ／＼な文献から——聖徒や、詩人や、農夫や、男のも女のも……

家政母 みんな一つのものを求めてゐるのです……いろ／＼の仕方——いゝものになりますやうに。

令嬢 身を入れてやつてみませう。學校を出てからの最初の仕事として……まとめたあとで私の論文をつけませう。

家政母 發表なさい。

令嬢 いゝえ。私はそんなことはちつとも考へてゐません。仕事は自分だけの楽しみです。

家政母 發表なさい。プブリクームを持ちなさい。私は安心して度い。あなたの初めての仕事の發表を見て。私の肩が軽くなるでせう。

令嬢 (首をたれる。)

家政母 (考へ乍ら) 私はあなたを御預りして來た。私の心配や楽しみが今果を結ぶ——

令嬢 (熱心に) さうなれますやうに。母は私の爲に宗教に就いてこんなに豊かな文庫を残して呉れました。私がこの仕事を思ひついたので……

家政母 お母さんはきつとお悦びになる。(勵ますやうに) お母さんはまた強い方でもあつた。

令嬢 お聞きしようと思つてゐました。母はジャン・ダークが好きでしたか。藏書の中に傳記が澤山あります。

家政母 さうです。(指さす。) そのためにあの榎の木の下に坐つて御祈するくせがあつた程です。(問) その頃あの榎の木はまだ若かつた。

令嬢 (沈黙。) 劍をもつて鬪ふ事が信仰と調和するだらうか。……私にはよくつかめない。母の氣持ちが——

家政母 あの方には烈しいところがあつた。

令嬢 でも私には解る。私はお母さんの血をうけてゐる。私はそれを壓へねばならぬ。劍と血とは神様がお嫌ひになる。何處までも愛——憎みはいらぬ。

(裏のテニスコートで球を打つ音。)



家政母 誰ですか。

令嬢 父とあの方。(面を頰らめる。)

家政母 (微笑する。) 倅が来てゐるのですか。

令嬢 え、さつきから。あなたが金澤さんへいらしてお留守の間に。

家政母 倅は仕合はせ者です。先生に愛されて。金澤さんが今晚お見えになります。それで支度をしなければなりません。

令嬢 金澤さんが？

家政母 金澤さんは今度大學に理化學の研究所を寄附しました。先生が大變悦んでゐられる。

令嬢 お手傳ひ致します。

家政母 いゝえN子さんに頼みませう。お客は先生のお友達二三方と金澤さんの親子きりです。

(退場。)

令嬢 (暫くじつと考へる。やがて再び書き抜きをはじめ。奥には奥がある。魂が掘つて行つた溝

の深さ——

(N子一束のタイプライトした紙を持つて登場。)

N子 先生は？

令嬢 テニスコート。

N子 やつと打てた。學會の講演の草稿——わたしの手は痺れた。朝からぶつ續けに打つた。

綺麗に出来上つた紙束が今私の手にある。これを先生にお目にかけてよう。(行きかける。)

令嬢 あとになさい。父は今に歸ります。少し話しませんか。

N子 (機械的に腰をかける。傍白。) わたしの手は痺れてゐる。

令嬢 (傍白。) 五月だ。鐵砲百合が匂うて来る。この人はふらんねるを着てよく似合ふ。

N子 (傍白。) わたしは悲しい。

令嬢 (傍白。) 今の球はあの方が打つたのだ。

N子 (傍白。) わたしは淋しい。外がもつと暗ければいゝ。



令嬢 タイプライティングはむづかしいの？

N 子 いゝえ。

令嬢 わたしに教へて下さい。

N 子 どうなさるんです。

令嬢 なんでも習つて置きたいのです。タイプライティングでもミシンでも――

N 子 お止しなさい。

令嬢 わたしは縫へる。わたしの部屋の窓掛けの飾りを。クシヨンの縁とりを――タイプライティングを教へて下さい。

N 子 (微笑する。) お止しなさい。指がかたくなります。

令嬢 わたしは習ひたい。わたしは働く事に慣れてゆきたい。

N 子 (皮肉に) 眞似事はお止しなさい。これはしなくてはならない者がするものです。

令嬢 (傷ついて) あなたの言葉には刺がある。わたしはあなたが好きだ。けれどこれだけは

いけない。わたしはやさしくあなたを叱ります。

N 子 わたしはひねくれてゐる。

令嬢 なぜです。わたしにだけは素直にして下さい。わたしの心は解つてゐて下さる筈です。

N 子 ごめんなさい。わたしはひねくれてゐる。出来るだけわたしは素直にしてゐる……あなたには。でも長い間に出来た癖なんです。

令嬢 (親しさうに側に寄る。) なほして下さい、その癖を。願ひです。そしたら私たちは一等お友達になれるんです。

N 子 (首を振る。) なか／＼癒りはしません。

令嬢 わたしたちの力では。でも出来るかも知れない。きつと出来る。あの力でなら。日向に蠟が溶けるやうに、あなたの魂の固意地なところを直すことが――

N 子 あなたは信仰の事を言つてゐる。さうでせう？

令嬢 (うなづく。) 恵みの力は――



N 子 (さへぎる。) わたしの魂は曲げられた。海邊の松が風に曲るやうに。あなたには迎も解らない。一朝一夕に出来た癖ではない。(悲しきうに) 今日迄わたしはどうして暮して来た? いばらの中を通つた。暗い谷の底を。臭いどぶの邊りを……

令嬢 それをわたしに話して下さい。

N 子 話しますまい。あなたのために——それをお聞きになつたら、あなたは生きて行かれなくお成りでせう。今のやうに快活には。

令嬢 暗の中にこそ光がさす。(ノートを開らく。) わたしは昔からの祈りの言葉を集めてゐる。暗い悩んだ魂たちが叫んでゐる。光を求めてゐる。(讀みかける。)

N 子 (手をあげる。) わたしは拒みます。あなたの御親切を。あなたの心は解つて居る。あなたはわたしに信仰の空気を吹き込まうとしてゐる。わたしはそれが我慢が出来なくなりさうです。

令嬢 ……………

N 子 わたしが固意地なのかも知れない。でもさうばかりとは思へません。

令嬢 えい。えい。それはわたしの力が足りないからです。

N 子 (涙ぐむ。) 唯我儘なN子として可愛いがつて下さい。でなければ寧ろ唯のタイピストの女として——あなたのお父さんに雇はれてゐる……

令嬢 (動搖して) 妹のやうに……何かの狂ひでいびつになつた妹のやうに——

N 子 タイプライティング一つ習ふのにもわたしにはどれだけの事だつたか。一生懸命の生きる道だつた! 打つ事は生きる事——

令嬢 (沈黙。)

N 子 わたしは苦しい。あなたがよくして下さるから。わたしは二つの心持の使ひ分けをしなればなりません。あなたはわたしをお嫌やにおなりでせう。その一つの心持をあなたが知つたら。

令嬢 いゝえ決して! わたしは擱んでゐます——あなたの本質を。それは貴いものです。



N 子 わたしはお暇を願ひませうか。二重の心持に板挟みになるのは苦しい……

令嬢 いけません。N子さん。わたしの家にいらして下さい。いつ迄も……わたしの心はあなたに引き付けられる。それをあなたは知つてゐる。さあ話して下さい。その二重の心持と仰つしやるのは？

N 子 申しませう。心の内で嘘をついてるよりましでせうから。一つはあなたの愛に對する心からの感謝。然しも一つはあなた方に對する一般的な憎み——わたしは申しませう。何もかも——わたしは憎みを持つてゐる。わたしを雇つてゐて下さる先生に對してさへも！ わたしを裁いて下さい。でもこれは本當です。

令嬢 どういふ憎みですか？

N 子 階級の憎しみです。あなた方の階級の不正に對する憎しみです。

令嬢 階級の不正？ それがわたしの不正なんですつて？ わたしは何時その階級に屬したんでせう？ 何時わたしの自由意志で——わたしの身に覺えのない事です。

N 子 覺えがなくても事實さうなんです。

令嬢 わたしよく呑み込めません。わたしは人間同志としてあなたに對してゐます。その他になにも知りません。

N 子 それを知らないでゐると言ふ事がもう不正なんです。澤山な人達の苦しみに關りを持つてゐないんです。冷淡なんです！

令嬢 冷淡？ わたしは本當に冷淡でせうか。

N 子 わからないかも知れません……わたしもさうでした。三年前にある一人の人に會ふ迄は。その人がわたしに何を憎むべきかを教へて呉れました。それ迄はわたしはあんなに苦しんでゐ乍ら、何がわたしたちを苦しめる敵であるかを知らなかつた。

令嬢 その人は誰ですか。あなたに憎みを教へた人は。

N 子 わたしの恩人です。虐げられた人達の爲に命を捧げて働いてゐる人です。

令嬢 なぜ憎まなければならぬのでせう。なぜ總てを愛してはならぬのでせう。



N 子 それは虚偽だからです。憎む事が出来なくなつた愛は死んだ愛です。

令嬢 いゝえ憎みの交らない愛こそ本當の愛です。そのうへ恵みは愛や憎みよりもつと高い

N 子 (遮る。) わたしは夢みる事は嫌ひです。わたしはそれを捨てました。

令嬢 (沈黙。) 期を待ちませう。ですけれどあなたわたしの家を出て行つてはいやですよ。N 子さん。

N 子 (うなづく。)

令嬢 お約束して戴けて？

N 子 (考へながら) えゝ。ですけれどわたしを感化しようとする事だけはよして下さい。

令嬢 感化？ わたしそんなおせつかいは致しません。唯ある見えない力が働いてあなたにある變化が起る事を望んでゐるだけです。

N 子 わたしはそんな力を信じません。それがいやなんです。

令嬢 でもあなたはわたしが神様にお祈りする事をお止めになる事は出来ずまい。

N 子 (考へて) それはあなたの自由です。それにあなたにある變化が起るやうに願つてゐるのはわたしだつて同じです。

令嬢 よくつてよ。わたしたちをお憎みになつてもかまはない。いつまでもわたしの家にゐらつしやい。金澤さんのお子さんが來ました。

N 子 (心もち青くなる。)

(少年庭から登場。)

少年 テニスをしませんか。彼の人はどこです。

令嬢 裏のコート。父とやつてゐます。

少年 僕彼の人にスペクトラムの實驗を教はるんだ。先生の部屋の機械で。

令嬢 さうですか。

少年 お父さんが今晚來るんでせう。



令嬢 えゝいらつしやいます。

N 子 (突然顔色を變へて立ち上る。)

令嬢 もつとお話しなさい——どうしました？

N 子 (無意識に腰を下ろす。)

令嬢 何か話しておあげなさい。あなたの小さい崇拜者に。

N 子 (かすかに震ひ乍ら) 金澤さんはこの家に來た事があるんですか。

令嬢 いゝえ一度も。今度大學に理化學研究所を寄附しました。その御禮の心持で父が今晚お招きしたんです。

N 子 先生は……それを感謝してお受けになりました？ 勿論——

令嬢 えゝ随分喜んでゐます。大變研究の助けになります。

N 子 (沈黙。)

家政母 (ドアを開けて顔を出す。令嬢に) 一寸いらしつて下さい。今晚の御相談があります。

(令嬢退場。)

(二人沈黙。)

少年 (悲しきうに) 僕コートへ行かう。(行きかける。)

N 子 (突然。) お待ちなさい。わたしも一緒に行きますから。(庭に下りる。)

少年 (嬉しきうに) 二人で組んで先生たちと仕合ませう。

N 子 やりませう。

少年 あなたのきつい球には彼の人だつて參つてゐる——

N 子 (素早く少し離れた木蔭のベンチを見付けて) 此處にいらつしやい。

少年 (並んで掛ける。)

N 子 あなたに少しお聞きしたい事があるのよ。よくつて。

少年 えゝなんでも。

N 子 あなたのお父さんはいつも何してゐらつしやいます。



少年 しよつちうせはしく家にゐる事は少いんです。

N 子 お母さんとお父さんとは仲がよくつて。

少年 (苦しきうに沈黙。)

N 子 いやでせう。こんな事を聞いて。でも應へて下すつて？

少年 え、あなたにはなんでも言ひます。お父さんはお母さんを餘り可愛がりません。それに  
大抵留守なんです。お母さんは可哀相です。

N 子 あなたは一人きりでしたね。

少年 え。

N 子 (躊躇して後) あなたは思はない？ 若し姉弟があつたらとは——

少年 よく思ひます。でもつまらない。そんな事ないんだから。

N 子 若しあるとしたら。

少年 (N子の顔を見る。) なぜそんな事を仰つしやいます？

N 子 い、え、けれどもわたしたちが姉弟のやうに仲よくしたらいゝでせう。

少年 (うれしきうに) え。

N 子 (涙ぐむ。少年の手を握る。)

(沈黙。)

N 子 あなたはお父さんを愛しますか。

少年 え、そして父は僕を随分可愛がります。

N 子 でもあなたのお父さんは随分ひどい事をなさいます。それに悪い遊びを——

少年 それは言はないで下さい。僕だけは可愛がつて呉れます。悪くても僕のお父さんです。

N 子 (少年の手をはなす。) わたしはあなたのお父さんは嫌ひです。

少年 (固くなつて沈黙。)

N 子 (激しく) わたしはあの人を憎んでゐます。輕蔑してゐます。あの人が自分の子供を可  
愛がるなんてそれは嘘です。



少年 でも僕だけは本當に可愛がります。

N子 他人からむしり取つて積み上げた金を譲るものが要るから。

少年 でも父は色々な慈善事業によく寄附します。

N子 ふん。狡いやり方！ この先生迄虜にしてゐる。

少年 (涙ぐむ。) なぜあなたはそんなに悪く言ふんです、僕の父を。僕の前で。いくらあなたでも——あなたはまるで怒つて了ふんだ。僕の父の事にさへすれば。

N子 ……………

少年 僕はなぐつてやるんだが。悪口を言ふものがあなたでなかつたら。

N子 (じつと少年の目にやけた顔を見る。次第に和らいだ様子になる。) 御免なさい。あなたはお父さんとは別ですもの。

少年 もう言はないで下さい、父の事は。あなたに關係した事ぢやないぢやありませんか。

N子 (青ざめる。) えゝ。えゝ。わたしに關係した事ぢやありません。

少年 そんなに變にしないで下さい。お願いだから。

N子 えゝ。もうよくつてよ。テニスをしに行きませう。

少年 (勇んで) 先生達をやつつけてやりませう。

N子 (獨語のやうに) さうだ。うんとやつつけて——わたしの鋭い復讐の球が防げるかどうか見てゐるがいゝ。(少年の肩に手を懸けてテニスコートの方へ退場。)

(令嬢と家政母話し乍ら登場。)

家政母 それがわたしに解つてゐないとお思ひになつて。

令嬢 (少し甘えるやうに) わたしだつて——學校へ上る迄あなたをママちゃんとお呼びしてゐたんですもの。

家政母 (やさしく) わたしは考へてゐる事がある。おなかの中で。

令嬢 (首を垂れる。)

家政母 わたしは仕合せです、あなたたちを信じてゐる事が出来るから (間。) わたしは困る……



…N子さんにこの家にゐて貰ふ事は。

令嬢 あの人はいゝ人です。正直な人です。

家政母 わたしは困る。あの方はこの家と調和しない。シリヤスな意味で悪い結果になるだらう。

令嬢 そんな事はありません。わたしの方が好きです。父も氣に入つてゐます。

家政母 剛巧で役に立つから。だがあの人には反抗心がある——敵意が。わたしは恐ろしい。それに觸れるのはいやです。

令嬢 わたしは引き付けられる、あの人その點に。あの人の本質が純粹な爲です。それにわたしたちの信仰はなんと言ふ力のないものでせう。若しあの人を受け入れて同化する事が出來ないとしたら。

家政母 危険なものを飼つて置くやうな事にならないでせうか。わたしは長い間預つて來たこの家の平和を大事にしたい。それにわたしには氣にかゝる事がある。あの人と金澤さんのお子さんの間は——

令嬢 信じていゝと思ひます。

家政母 (頭を振る。) 若し清いものをスポイルさせるやうだつたら——

令嬢 わたしが責任を持ちます。わたしにはよく解るのです。あの人心の働き方が——

家政母 もつとよく考へてみませう。ですが、わたしはこの意見については少し頑固ですから——

令嬢 わたしも同じです。お父さんが歸つていらつしやいました。

家政母 (退場。)

博士 (汗を拭き、歸つてくる。) さんぐ、やられた。若いものにはかなはない。はゝゝゝ。

(ヴェランダに上り椅子に懸ける。) いゝ氣持だ。

令嬢 いゝお天氣が続きます。

博士 裏の藪で鶯が鳴いてゐた。

令嬢 南の國は違ひます。空の色も空氣の薫りも——T市ではとてもこれ程穩かではありません。



ん。

博士 F市はいゝ所だ。松林と不知火——こゝでみつちりと學問をやりたい。(ポケットからタ  
イブライトした草稿を出して目を通す。)

令嬢 今年の學會では何の講演をなさいます。

博士 光の干涉と星の測度に就いてだ。お前の仕事は大分はかどつたかね。

令嬢 えゝ。この頃はそれで夢中です。

博士 うんとやるがいゝ。信仰でも學問でも魂を打ち込んで精進する時めぐまれる。わしは昨  
日も星を観測し乍ら思つた。わたしたちの魂は言はばレンズのやうなもんだ。天から來る光  
を通すやうにいつも氣を付けて磨かねばならない。聖人の魂は屈折率の高いレンズだ。

令嬢 色々な人の祈りを見ますとその人たちの魂がどの高さ迄昇つてゐるかがよく解ります。  
これ以上の祈りはもうあるまいと思ふ。するともつと深いのが又あるのです。

博士 さうだ。眞理の海には限りはない。段々深く鉛を下ろす——

令嬢 わたし聖書からかう言ふ言葉を見付けました。「海の深所も神の住家なり。山の頂も亦  
神のものなり」。

博士 山の頂も亦神のものなり——實にいゝ。敬虔だ。魂を清く高くするんだ。そこからは天  
の星が近い。

令嬢 山の上の嵐——孤獨な魂が雷の中で神に祈つてゐる……わたしはさういふ所を何時も  
夢みるのです。

博士 (令嬢の顔を見る。) わたしはあれの事を思ふ——お前のお母さんの事を。スイスの山  
のホテルでひどい嵐に遭つた事があつた。その時あれは少しも驚かないで窓から稻妻のする  
谷を見てゐた。

(問。)

令嬢 お父さんはお淋しくはないのですか。

博士 わしには學問がある。それにお前がゐて呉れるから——お前は當分こちらにゐて呉れ



るのだつたね。

令嬢 えい。ずつとお側にゐますわ。

博士 工市に行つて見たくはないか。今イタリーのオペラが来てゐるやうだね。

令嬢 別に行つて見たいとは思ひません。こゝで——お母さんからのこして貰つた部屋で静かに勉強したく思ひます。こゝは氣に入つてゐるのですから。

博士 (微笑する。) それがいゝ。お前は幸福さうに見える。わしは満足だ。やりかけた仕事をしよう。(退場。)

令嬢 (椅子から離れて、空を仰ぐ。やがて庭に下りる。芝生の上を何か空想し乍ら歩く。横手の榎の木の下に行き、氣が付いたやうに立止まり、榎の木を見上げる。數秒間沈黙。やがて榎の木の下に坐る。考へに耽る。)(間。)

青年 (上着を脱いだシャツの儘ラケットを持つて歸つて來る。令嬢の姿を認め靜かに近づく。)

令嬢 (氣が付かずに考へ込んでゐる。)

青年 そんな所で何をしてゐるんです。

令嬢 なんでもありません。(赤くなる。) わたし本當はジャン・ダークの事を思つてゐましたの。

青年 さうですか。だがあなたはジャン・ダークとはどうも似てゐないやうだ。(芝生の上に腰を下ろす。)

令嬢 どうして?

青年 あなたはもつと靜かです。

令嬢 わたしには劇しいところがないと思つて?

青年 さうではない。だがジャン・ダークには敵と言ふものが目安にあり、劍を持つて立つたんだから。あなたは憎みと言ふものを認めない筈だつた。もつと明るい恵まれた心を持つてゐるのでせう。

令嬢 (うなづく。) 本當はわたし素直にしてゐれば自然に明るくなるんです。どうして鋭く、



暗くならなければならぬのだか——どうもぴつたり解りません。

青年 あなたは明るくてゐらつしやい。

令嬢 どういふものでせう。わたしさつきジャン・ダークのことを考へようと思つても、いつかテレシヤのことを思つてゐるんです……あなたがいらした時わたしが何を考へてゐたと思つて。

青年 さあ。わかりません。

令嬢 わたしが死んだら薔薇の雨を降らせよう——わたしテレシヤのさう言つた言葉を考へてゐました。

青年 それはすばらしい。空想もそこ迄行けばこの世離れがしてゐる。

令嬢 空想でせうか。

青年 空想ですね。少くとも夢だ。僕のやうに科學をやつてるものなどには猶更です。

令嬢 でもわたし夢と實際との境目をそんなにはつきりとさせたくは御座いません。それにわ

たしにはこの世界がさう見えるのですもの。

青年 (ある感じを單めて) それでいゝ。僕だつて薔薇の花であなたをうづめたい氣がするんだ。今の僕たちがそれだけの事を空想する事が許されなかつたら、この世界はあんまり貧弱過ぎるだらう。

令嬢 心をきれいにして悪いものや、みにくいものを考へないやうにしてゐれば、この世界が明るくなるのではないでせうか。

青年 さうです。僕は窮屈な考へ方をするのはいやだ。僕は貧乏だがいちけたくない。暗い研究室で、一日分光器をいぢつて暮してゐるが、人が晴やかに暮してゐるのを見るのは嬉しい。令嬢 だれどあなたは神様をお信じにならないのでせう。

青年 僕は信じません。プリズムで何千萬哩離れた空の星から來る光を分析して見る。するとそのスペクトラムの性質で、その星にどんな物質が存在するかを知る事が出来る。僕はその時嚴肅な氣がする。人間の理性の神祕を驚ろく。それ以上僕は別に神祕なものを假定しなく



でも満ち足りるのです。

令嬢 わたしそれがあき足りません。それでいつ迄も淋しくならないものでせうか。

青年 先きの事は解りません。だが事實僕は現在淋しいとは思ひません。(燃えるやうに令嬢を見る。)僕は充分に幸福です。あなたはさうではないのですか。

令嬢 (伏目になる。)わたしも幸福で御座いますわ………だけどわたしはそれを恵みだと思ひたいのです。

青年 あなたはそれでいゝ。多分あなたの魂が僕のより高尚なのでせう。僕はもつと實質的な性質です。ずつと貧乏して來たんですから。恵みと言ふものを感じるにしても、あなたよりもつとサブスタンシヤルなものになるでせう。

令嬢 パンの苦しみを知らないのがわたしの一番ひげ目です。わたしの家は儉しく暮しては來たんですが——わたしはどんなにそれを負ひ目に感じるでせう。だけど自分で其苦しみを避けて來た譯ぢやないんです。わたしが氣が付いた時にはもうさうして育つて來てゐたんです。

青年 その通りです。そんなに氣にするには及びません。わたしは寧ろ物質の事で汚れずに清く育つて來たあなたを祝福します。

令嬢 みにくいものの影でわたしの心を少しでも曇らせたくない——出來ますならそれがわたしの願ひです。

(間。)

青年 どうなるんでせう。僕たちの運命は。

令嬢 ……………

青年 僕は暗い事は考へられない。又そんな譯もないんだ。今は五月だ。空も地も明るい——令嬢 明るく、清く、——神様にお任せして……………

青年 (ラケットを突いて立ち上る。)僕は生命の喜びを享け入れよう。のび／＼と生きるんだ。

令嬢 あなたはいぢけないで、それこそ薔薇の雨を降らす事でも考へてゐて下さい。  
えい。だけどわたしN子さんの顔を見てゐると心がおしつけられるのです。



青年 僕はN子さんと随分議論しました。僕は彼の人の物の見方には不賛成です。純な人だがいぢけてゐる。僕に向けるはN子さんだつて貧乏の味を知らないとは言へないでせう。道を歩いていぢけた花を見つけたら人の心は暗くなる。N子さんはさう言ふんだ。

(近くの屋根から白い鳩が飛んで来て二人の側に下りる。)

令嬢 決心した鳩……わたしはいつ迄も鳩で居りませう。(鳩を抱き上げる。) だけど若しも鳩がどんな穢れにもその羽根を染めず、自分を殺すものの手の中でも清らかな目付きをしてゐたら、誰も侮る事は出来ませう。

青年 さうです。いざとなつた時には力を出ませう。だがいつもは平和に暮したいものです。

令嬢 (鳩を放つ。) わたしの部屋へ行きませう。あなたに見せて上げるものがありますわ。

青年 なんですか。それは。

令嬢 まああとで。待つてゐらつしやい。

(二人令嬢の部屋に退場。)

家政母 (登場。) N子さんはゐませんか。(ヴェランダ迄出る。) N子さん。N子さん。(つぶやく。)

今頃何をしてるんだらう。忙しいのに！ (退場。)

(N子と少年手をつないでコートから歸つて来る。)

少年 僕くたびれちやつた。あんまりきつくやるんだもの。

N子 なんです。つまらない。さあベンチのどこ迄駆けつこよ。

少年 よし。

(二人一生懸命走る。少年の方が一步先に着く。)

少年 どうだ。

N子 (ベンチに掛け、息をはずませ乍ら) あなたは男子だもの。

少年 (並んで掛ける。) やあい。息を切らしてらあ。N子さん。

N子 (突然少年を抱く。) N子さんと言はないで姉さんと仰つしやい。

少年 さう言つてもいゝの。(N子の腕の中で) 姉さん。



N 子 えい。えい。(少年の頭を撫でる。) あなたの髪はやはらかできれいだ (やがていらくして立ち上り、少年を放す。) さあ今度は向ふのヴェランダ迄。

少年 いやだよ。あなたは今日どうかしてるんだもの。

N 子 どうもしてはゐませんよ。

少年 もうじつとしてゐませうよ。今日はちつとも落着いて話して呉れないんだもの。僕の言ふ事をよく聞いて呉れないんだもの。

N 子 (ベンチに掛ける。) 落着いて話させうね。なんでも仰つしやいな。

少年 なんでも言つていゝの。

N 子 えい。

少年 さつきの事はどう言ふ意味なの。

N 子 なんですか。

少年 姉さんと言へと仰つしやるのは。

N 子 あなたはわたしの弟だからですわ……さう思ひたいからですわ。

少年 僕はこれから本當にさう言ひますよ。僕は學校でも、いつでも姉さんの事を思つてゐる。

N 子 わたしもあなたとお話するのが一等好きですよ。

少年 今度僕の家へいらつしやらない? お父さんはゐませんよ。

N 子 (眼を光らす。) あなたの家へ? えい行きますよ。わたしあなたの家の様子が知りたいんだから。

少年 どうして?

N 子 あなたの廻りの事は何んでも知りたいの。あなたなんでもかくさずに話して下さるんですね。

少年 姉さんには何んにもかくしません。

N 子 (鋭く。) 祕密でも……あなたの家の?

少年 (やゝ躊躇しつゝ) えい。



N 子 (再び少年を抱く。) ねえ。あなたわたしの言ふ事聞いて呉れて？

少年 あなたの言ふ事だつたら何でも聞きます。

N 子 本当ですか。

少年 (きつぱりと) ええ。

N 子 ぢやああなたは姉さんと一緒だつたら何處へでも行つて呉れて？

少年 (眼をまるくする。) 何處へ行くの。

N 子 何處かへ旅行するの。二人きりで……………誰も來ない所へ。綺麗な川の流れてるところへ。

少年 僕行きたいんだけど……………誰にも黙つて？

N 子 (鋭く。) ええ。逃げ出すの。

少年 ……………

N 子 いやですか。今と言ふ譯ぢやないの。いざと言ふ時が來た時……………

少年 ……………

N 子 いやなんですな！ あなたは。

少年 (頭を振る。)

N 子 わたしと逃げて下さつて？

少年 (うなづく。涙が落ちる。)

N 子 (少年を引き寄せはげしく額に接吻する。)

令嬢 (部屋に登場。ちらと二人を見る。二人離れる。そつと机の上の本とノートとを取つて退場。)

少年 (立ち上る。) 今日は僕歸ります。

N 子 さうを。

少年 歸つてよく考へてみます。胸が苦しくなつちやつて。

N 子 今言つた事忘れてはいやですよ。

少年 (きつぱりと) ええ。



(少年退場。N子ベンチに腰を掛け、じつと考へる。やがて立ち上り、落着かない様子で庭をあちこち歩く。)

令嬢 (静かに庭を廻つて登場。) N子さん。わたしあなたに話したいことが……

N子 ……………

令嬢 かけませう。

(二人ベンチに掛ける。沈黙。)

令嬢 率直に申します。あなたにですから。

N子 (うなづく。)

令嬢 あなたとあれとはどう言ふ間柄なんですの。金澤さんの息子さんと……

N子 ……………

令嬢 どうか彼の人を傷付けないで下さい。

N子 (青ざめる。唇が震へる。)

令嬢 あなたのやうな方が……わたし本當に解りません。

N子 (吐き出すやうに) あれはわたしの弟です。わたしの腹ちがひの弟です。

令嬢 ……………

N子 わたしは金澤の私生兒です。

令嬢 それは……それは本當の事ですか。

N子 本當です。今日までかくして居ました。金澤が十九年前に一人の女に手を付けて生せて、捨てたのです。

令嬢 (青ざめる。) なんと言ふ——

N子 驚きになるのは尤もです。然し動かしやうのない事實です。

令嬢 それだつたら猶更——どうしてあなたはあの少年と……

N子 わたしが考へてゐる事はあなたなどに思ひも付かない事なんです。あなたは氣絶してお了ひになるでせう。



令嬢 言つて下さい！ かまひません。

N 子 復讐です。弟によつて父に復讐する事です。

令嬢 (立ち上る。) N 子さん！ それは――

N 子 いゝえ。それはわたしの強い欲望です。わたしがF市へ来たのもその爲でした。憎む可き父に自分のした事の價を知らせてやる爲でした。

令嬢 あなたの實のお父さんに……

N 子 父はわたしの敵です。一番深い恨みのある――わたしと母とがどうして暮して来たか？ 母がどうして死んだか？ どんな罰を與へても過ぎる事はありません。

令嬢 愛は――お父さんへの愛はおこらないのですか。

N 子 わたしは父を見た事もないのです。一度もわたしを抱いて呉れた事もない父。(涙をこぼす。) わたしの爲に一口も祈つて呉れた事もない――わたしの教育の爲に一字も――數を數へる事さへも教へて呉れた事のない父を愛しろと仰つしやるのですか。わたしの母は父に捨

てられてから困つた舉句わたしを連れ兒にしてあるコックと一緒にになりました。それがわたしの父でした。亂暴な、淫らな、その獸のやうな男が！ それは母が金澤から貰つた手切れの金を少し許り持つてゐたからです。母はその男に一生涯ぶたれ續けて死にました。その間に繼子のわたしがどんな風にして育つたでせう。それでもその男は兎も角わたしを育てて呉れたのです。金澤よりかずつとましです。十三の歳にわたしは或る曖昧屋へ奉公にやられました。勿論賣られたんです。或る一人の人がわたしを救ひ出して呉れる迄――わたしは闇の中に生きてゐました。わたしは父を憎みます。(手をあげる。) 父に禍ひがありますやうに――

令嬢 あゝ。あなたは自分のお父さんを呪ふのですか。

N 子 長い間わたしが朝夕考へて来た事は何んだつたと思ひになります？ それはどうして父に復讐しようかと言ふ事でした。こちらへ来ればその機會があるかも知れない！ わたしはさう思つてF市へ来たのです。



令嬢 なぜその人はあなたに愛を教へないのでせう。

N 子 不正を憎む心に燃えてゐるからです。何がわたしたちをこんなに虐げるのか？ その對象をはつきりと見抜いたからです。それは金澤がその真先に立つてゐるあなた方の階級です。父はわたしには二重の敵です。今の世の中の正義——一つの大きな愛の爲には何物をも——親子の情實をも捨てねばなりません。憎みが何んでせう！ その愛を燃やす爲の油になるのなら。それは許されていゝ——

令嬢 弟さんに何んの罪があるのです。あの羊のやうな少年を犠牲にする権利はあなたにありません！

N 子 彼の少年は——弟は可哀相なそなへものです。わたしは復讐の此上ない機會を掴みました。それは弟によつて父に復讐する事です。父は弟だけは盲目的に愛してゐます。わたしが弟に毒をつぎ込む。弟を墮落させる——若しも彼が自分の可愛い息子が獸のやうな罪に陥つて、それが解つて、心がすたすたに引き裂かれてゐるのを見たら……

令嬢 (身慄ひする。)

N 子 わたしはそれを思ふと喜びに震へるのです。その時こそ父は自分の惡の價を知るでせう。

令嬢 弟さんのその時の苦しみは一體なんの價なんですか？ N子さんそれを考へて下さい。

N 子 それは……それはわたしにも解りません。

令嬢 それは恐ろしい、恐ろしい事ではありませんか。

N 子 恐ろしい事です。然し事實の力が仕方のない勢になつてゐるのです。わたしにとつては正義と復讐とは一つになつて燃えてゐるのです。

令嬢 あなたは弟さんを可愛いとは思はないのですか。

N 子 ……………

令嬢 姉さんらしい心は起らないのですか。あの素直な清い少年を誰が愛さないものが居りませう。他人のわたしでさへも弟のやうに可愛いのです。それに親身の姉さんが……

N 子 わたしは可愛いのです。あれを抱く時に清い——姉弟の愛が湧き出るので。今日もわ



たしはそれを感じました。あの子の丸い手を握つてゐる時わたしにはなんとも言へない悦びが……母のやうな心さへ——

令嬢 N子さん、考へて下さい。それが本當の心です。あなたはそれを無理に裏切るのです。弟さんは素直な心であなたに身をゆだねてゐる。するとあなたはあの子を抱き乍ら、心では恐ろしい事を考へてゐる——

N子 (顔を被ふ。)

令嬢 お願ひです。それだけはよして下さい。弟さんがそれを知つた時の無慈悲な苦しみを思つて御覽なさい。本當にそれは恐ろしい事です。

N子 わたしは……わたしは可愛い弟をそなへものにしてしようと思つたのです。わたしたちの大きな戦ひの爲に。

令嬢 たとひ弟さんをそなへものにする事が出来ても、あなたの魂をそなへものにする事は出来ません！ わたしが一番恐れるのはそれです。弟さんが絶望的に苦しんでゐるのを見た時

に、あなたが御自分を支へる事が出来るでせうか？ とてもあなたのやうな方に出来る事ではありません。

N子 (すゝり泣き乍ら) どうすればいゝのです。わたしの位置に立つたとしたら。それをわたしに言つて下さい！

令嬢 N子さん、わたしにはその力がありません。わたしはそれが解りました。あなたからお聞きした事はわたしの胸をかき破りました。わたしのやうに悩む事の少ないものが、どうして今のあなたに力のある助言をする事が出来ませう。それは僭越な事です。あゝ、わたしは知らなかつた。あなたは今わたしには寄り付けない程に見える。あなたが通つて來られた大きな悩みの爲に尊く見える！

N子 わたしは父を許すことは出来ません。わたしの憎みを抑へる事は出来ません。

令嬢 わたしはお赦しなさいと言ひたい。だがわたしに力がない！ わたしの足場がくづれた氣がする。N子さん唯わたしはあなたに願ひします。訴へます。どうか弟さんを救つて下



さい。罪のない魂を道具にする事だけは止して下さい。それは正しくない事です。それは今のわたしでもあなたと何處迄も争ふ事のできる事です。

N 子 ……

令嬢 あなたの姉らしい愛にかけて——あなたの魂の一番深い所にある聲に訴へて！ わたしはあなたの前にひざまづきます。(ひざまづく。)

N 子 (沈黙。きつぱりと) 止めませう！

令嬢 ありがとう！ N子さん。

N 子 あゝ、然しわたしは武器をなくしました。唯一つの……

令嬢 清い武器を使つて下さい。

N 子 わたしになんの力があります。向ふは金と地位と社會的勢力とを持つた男子です。わたしは貧乏な職業婦人です。わたしがどんなに手向つたにしても、彼はさうさもなくてわたしをふみつぶすでせう。内から責めるより方法はありません。彼が若し私に對して父らしい心

を持つてゐるのなら、一つの方法があります。それはわたしの惨めな有様を父にまざくと見せてやる事です。然し彼はわたしを知らないと言ふでせう。わたしが死んでやれば不安の種がなくなつて喜ぶでせう。

令嬢 あなたに同情します。あなたの憎みがわたしにも燃え移りさうです。あなたは本當に苦しいでせう。わたしはちつとも知らなかつた。彼の人を立派な紳士だと許り思つてゐました。

N 子 わたしが一番腹だたしい事は他の人達が彼を非難せずに入ける事です。尊敬すべき人達でさへも彼と平氣で握手する……あゝ先生でさへも！

令嬢 (ショックを感じて沈黙す。)

N 子 何處に正義があるんでせう。誰がわたしたちの爲に悪人を責めて呉れるのでせう。

令嬢 父は彼の人と席を同じくしてはなりません。父に交りを絶たせます。

N 子 ……

令嬢 父は彼の人の寄附を受けてはなりません。わたしはそれを拒絶させます。



N 子 貧しいものからむしり取つた金で……それで學問の保護者としての名譽が買へるとしたら——わたしは嘲笑したくなります。わたしは今晚父が招かれて来る事を聞いた時に心が煮え返りました。彼をもてなす爲の支度をわたしがしなければならぬとしたら。何と言ふ恥辱でせう。わたしは今晚限りこの家を出て、弟と駈落しようと思つてゐたのです。

令嬢 (青ざめる。) あぶない時だつた。(間。) 恐しい事が起りかけて居る時に……わたしは安らか過ぎました。夢み過ぎてゐました。醜くい、きたないものが足もとにころがつてゐるのにわたしはそれを見ずにゐました。あなたは弟さんを損なふ事を思ひ止つて下さいました。わたしの家から出て行く事をやめて下さい！

N 子 わたしにそれが出来るでせうか。

令嬢 わたしのために、N子さん！

N 子 でも、父がパトロンのやうな顔をしてこの家に入入りするのを見なければならなかつたら。

令嬢 誓つて父に彼の人と絶交させます。寄附を拒絶させます。

N 子 (涙ぐむ。) わたしに執着のあるのは唯あなただけです。復讐の道がなくなつた今、わたしを引き付けるものは此處には何も御座いません。

令嬢 わたしの家にゐらして下さい。わたしは益々あなたに引き付けられます。あなたによつてわたしに新しい芽が——未知の世界が開けて行くやうに思へるのです。

N 子 ……

令嬢 それに今のあなたをこの儘遠くへやる氣にはなれません。傷ついた、荒んだ心で——たとひわたしがそれを明るくする力は持たなくても、あなたの暖かい友として……

N 子 やめますわ。(涙ぐむ。) だけどわたしを可哀相だと思つて下さい！

令嬢 (N子を抱く。) 可哀相なN子さん！ わたしはあなたの味方です。待つてゐて下さい。わたしを臆病な、たよらない娘と思つて下さいませ。わたしが決心して立ち上つた時、どんなにあなたの強い味方になれるか！ その日が今に来るでせう。



N 子 わたし本當は……あなたとお別れするのはつらいのですわ。  
(二人抱き合ふ。)

第二 場

令嬢の部屋。 清楚な洋室。窓掛けもテーブル掛けも皆白い。部屋の一隅の書棚の上に小さな龕風の扇のついた繪が開かれ、十字架と緋のマントウをつけたマグダラのマリアの跪いてゐる姿が見える。令嬢テーブルについて考へてゐる。惱みと興奮との表情が見られる。聽て立ち上り部屋をあちこち歩く。

令嬢 わたしの欲ねがひは何だつた？ 心の内も身のまはりも清淨にすると、美しいものを夢みる  
こと……それが間違つてゐたらうか？ 醜いものの影さへも翳さぬやうにわたしの魂を守る事……それが間違つてゐるのだらうか？ (立ち止まる。) でも醜いものがわたしの足もと

にころがつてゐる。わたしの家の中に、庭の上で、部屋の隅で！ それをわたしは見ない事が出来るか？ (身慄ひする。) 醜い事の中でも一番みにくい事だ。眞黒な事だ……

青年 (ドアをあけて登場。) たうとう出来ました。

令嬢 (沈黙。)

青年 さつきのいばらかくしは出来ました。

令嬢 (黙つてテーブルにつく。)

青年 あなたはどうしたんです。ひどく顔色が悪い。

令嬢 わたしもう遊ぶ事が出来なくなりました。

青年 何故です。三十分前あなたはあんなに快活でした。この部屋で、この机であなたは明るく笑つてゐた。

令嬢 わたしは快活をなくしました。

青年 僕たちは天國の遊びの事を話しました。あなたはいばらかくしを僕に解けと言つた。僕



は先生の研究室でそれを一生懸命解いた。分光器で分析するやうな熱心で……あなたの心の秘密をみつける事が出来ると思つたからです。それは豫期した通り甘い秘密だつた。あなたの天使のやうな悪戯に僕はすつかり幸福にさせられて、直ぐに飛んで來たのです。僕はあなたがどんなに無邪氣な冗談で僕を迎へて下さるかと思つてゐたのです。

令嬢 (顔をいがめる。) 許して下さい。

青年 どうしたのです、あなたは。

令嬢 三十分の間にわたしは恐い事を知つたのです。闇がわたしの心を覆うて了つたのです。

青年 (令嬢を凝視する。) 話して下さい！ 何をあなたは見たのです？

令嬢 わたしは悪魔を見た。(身慄ひする。)

青年 悪魔？ そんなものは居ません。いや御覽なさい。(ドアを閉める。) もう這入つて來る事は出来ません。こゝは僕たちの世界です。僕たちが居る時こゝは天國です。

令嬢 いゝえ。もうこの部屋の内に這入つてゐるのです。

青年 何を言ふのです。あなたはさつきこの部屋の事を「淨い部屋」だと言ひました。明るい窓と白いカーテン——あの十字架とマグダラのマリア——あなたはあの燃えるやうな緋の衣をあなたの魂の色だと言ひました。

令嬢 わたしはもうその矜りをなくしました。すべてはきれいな趣味でした。わたしはさつき迄こゝに腰かけてかう自分に言つてゐました——あのカーテンは白くて美しい。雪のやうだ。あの緋のマントウはわたしの心臓、高い天井と清楚な机……すべてが清らかだ。そしてわたしもまた清い……だけでももうわたしはさう思つてもちつとも満足ではなくなりました。

青年 あなたに起つた事を話して下さい！ それ程あなたを打つたものは何です。

令嬢 話す事が出来ません。

青年 なぜです。

令嬢 人の秘密です。眞黒な——それも直ぐ側にゐる人の……その人の爲に黙つてゐなければなりません。



青年 (沈黙。) 祕密をあばく事を勧める事は出来ません。だが僕は言ひます。それがどんな事であるにもせよ、あなたのこれ迄の態度は間違つてゐない。どうか快活をなくしないで下さい。

令嬢 わたしは醜いものを見たのです。わたしの心は暗くなつて了ひました。

青年 あなたの明るさはあなたの尊い性質です。それをなくしてどうしますか。それは實に惜しい事だ。

令嬢 でもわたしは悪魔を見たのです。それは實に醜い。いやな姿をしてゐました。わたしはどうしてもこれ迄のやうに快活に生きては行かれません。

青年 負けてはいけません。醜いものは今初めてあるのではない。光は暗よりもどんな場合でも高いものでなければならぬ——あなたはさう言つたではありませんか。僕はそれを信じてゐます。

令嬢 わたしはさう申しました。それなのにわたしの心にはもう力がないのです。それが抜け

たやうに感じるのです。今はその言葉がおぼつかなく自分に聞えるのです。

青年 しつかりして下さい。僕はあなたに快活を失はせたくない。それは尊いものなんだ。僕はあなたの快活な顔を見るのがどんなに愉快だつたでせう。僕はそこにこの世のものに穢がされてゐない清淨なものに觸れる氣がしてゐました。それは本當にあなたに似合ふのです。

令嬢 尊いものは苦痛——惱みの經驗ではないでせうか。

青年 その通りです。だがそれはそれ自身に尊いのではないでせう。それが悦びを呼び出す時だけ尊いのです。本當の悦びは一番高い——

令嬢 惱みを知らない悦びに價值があるでせうか。若しも光に暗を破るだけの力がなかつたとしたら？

青年 さうではありません。現に僕はあなたによつて僕の魂の闇を破られてゐたのです。あなたは自分に氣が付かずにそれをしてゐたのです。僕はあなたに觸れる事でどんなに清くされてゐたか知れません。



令嬢 いゝえ、わたしにはそんな力はありません。

青年 あなたを信じて下さい！

令嬢 でもわたしさつきそれを知つたのです。あなたに打ち開けて相談出来ないのがわたしは悲しい。さうしたらあなたも解つて下さるでせう。待つて下さい。今に解りますから。

青年 えゝ待ちませう。然し僕はそれを聞いても僕の考へが變るとは思ひません。確かにあなたの明るさは正しいのです。

令嬢 本當の正しさがわたしは欲しい！ この世の中にはなんと云ふ醜い事があるのでせう。ひどい苦しみをうけてゐるものがゐるのでせう。

青年 僕は苦しみや醜くさを知らないとは思つてゐません。然しそれは決してあなたの思つてゐるやうに、悦びや光りのやうに尊いものではありません。あなたは未知のものを誇張して感じるのです。若しもこの世に醜くさと苦しみが多いからと言つて、光りや悦びに價值がないやうに言ふものがあつたら、それこそ大きな冒瀆です。それはいぢけた考へです。僕は醜

くさと苦しみとを知つてゐるだけに、光りと悦びとを一層讚美したくなるのです。

令嬢 それはあなたのお苦しみが未だ足りないからではないでせうか？

青年 (沈黙。) それは恐しい問ひです。僕はそれに對しては謙遜であるべきでせう。然し僕はどうしても固執せずにはゐられません。僕の考へは少くともこの點だけでは間違つてゐません。どうかあなたの明るさをなくしないで下さい。それをなくしたらあなたの一番いゝところをなくするのです。

令嬢 でもわたしはもうそれをなくしたやうに思ふのです。

青年 そんな事はありません。僕は實に残念だ。(ある感じをこめて) 僕と言ふものがあなたを明るくさせるだけの力がないものだとしたら！

令嬢 (赤くなる。) さうではありません。

青年 ではもつと快活にして下さい。もつと楽しさうに——愛し合つてるものが二人でゐる時にするやうに……



令嬢 (なやましく呼吸する。) でも……

青年 僕はさつきから感じてゐるのです。激情を——愛の嵐を……

令嬢 (黙つて手を與へる。)

青年 (手にキスする。)

(沈黙。)

青年 僕たちは幸福だ。

令嬢 でも私は幸福なのが恐い！ (そつと手を引く。) 大きな悩みが他の人たちにある時に二人の幸福に浸つてゐてもいゝものでせうか？

青年 大きな問題です。僕は深く考へませう。ですが僕が言つた事はそれより決して小さい事ではありません。僕はあなたをそれなくしたらあなたのために惜しむ——解つて下さるでせう。僕は貴い石が、若し自分のものだと思ふのでなかつたら、こんなに頑固には言ひません。

令嬢 解りましたわ。わたしも考へませう。でも今は許して下さい。わたしの心が押しつけられてゐますから。もつと静かになりますまで——

青年 (うなづく。) では静かにしてゐらつしやい。(退場。)

令嬢 (しばらく考へてゐる。立ち上り、カーテンを開ける。若葉と外光。)

N 子 (憂鬱な顔付をして登場。) 弟にどうしませう——打開けるべきでせうか……私は？

令嬢 ……

N 子 わたしは迷ひます。この儘黙つて今迄のやうにはしてゐられない。と言つて總てを知らせたら——どんなに驚くでせう、弟は……色々考へて見ました。けれど決心がつきません。

令嬢 今は知らさない方がよくはない？ あの蠟のやうな頭にこんな恐い事を烙き付ける……あんまりひどい事です。

N 子 わたしもそれを思ふのです。弟には打撃が強過ぎるでせう。あの子がそれにたへられるかどうか……



令嬢 も少し時を待ちませう。

N 子 さうませう……わたしも勇気が御座いません。でもどうしたらいいものか——これから後……

令嬢 断然おやめにならなければなりません。これ迄のやうにあしらふ事は——

N 子 でもわたしは後始末をしなくてはなりません。わたしがやつて来た事の——打ち開けずにそれをするのは難かしい事です。

令嬢 勇気を出して——やつて御覽なさい。出来ない事も御座いますまい。

N 子 でも今度は二重にあしらふ事になるでせう。心にもない事を言はなくては——

令嬢 わたしもそれを恐れます。でも弟さんの爲に——今他に道は御座いますまい。

N 子 一つの偽りがある時あとからあとから偽りをつけ足さなければならなくなる。本當に誰がこんな事をわたしにさせるのでせう？ 悪を造つたものは知らずにゐる。他人ひとがどんなにその後始末をしてゐるかと言ふことを！

令嬢 (沈黙。)

N 子 (いらくする。) わたしが母とあゝして苦しんだ——それはみな父が作つた悪の後始末ぢやありませんか？ あの繼父にぶたれて寒い縁端で泣いてゐると、入日が沈んで……お母さんの咳の聲を障子の影で聞いたとき、私はも少しで料理用のナイフをあのコツクにぶつけようと思つた——あの時も父は知らなかつたのだ。そして今度はわたしと弟とが苦しい思ひをするのです。

令嬢 何と言つていゝか……度どしんで聞いてゐるよりありません。

N 子 申しますまい。自分の苦しみを負つて生きませう。(涙ぐむ。) わたしは思ひはしなかつた。自分の怨みを人に言はうなどは。それよりも私は思つてゐた。唯行爲にわたしの全身の憎みを打ち込まうと——けれどあなたが餘りやさしくして下さるので……

令嬢 同情するなんて申しますまい。今のあなたに何の役に立つでせう？ 寧ろあなたの心に一ばいある悲しみや怒りをお洩らしなさい。私はそれを鞭のやうに受けてゐたい。少しでも



あなたの胸が透くのだったら……

N 子 ごめんなさい。わたしあなたの明るい世界を暗くしてすつた。汚ないものを掴み出して、あなたの目の前にぶちまけた。あなたが見ずにはゐられないやうに押しつけて……

令嬢 いゝえ、見るべきものを見させて貰つた……私はそれを感謝してゐます。さうでなかつたら、わたしは自分のこしらへ上げた美しい世界に、いゝ子になつてゐたかも知れません。でもあなたの仰つしやる事は本當です。さつきからわたしは違つた世界に喰込まれて了ひました。わたしはきれいな世界を毀しました。こゝにかうしてゐても、一時間前とはまるで違つた氣持です。

N 子 (沈黙。)

令嬢 わたしさつきから思つてゐます。あなたの生活はどんなに決心したものでせう。それは充實してひきしまつてゐるやうに見える——わたしはそれをわたしのと較べずにはゐられません。

N 子 わたしは一つのことを欲つてゐます……一人の人に捧げてゐます。それがいゝか悪いかは知りません。唯それはわたしの止む事の出来ない欲望です。

令嬢 (緊張する。) それを話して下さい!

N 子 わたしの欲ひはわたしたちの敵を倒す事です。それはわたしの欲ひです……又あの人の欲ひです。

令嬢 あなたの敵が何であるか——わたしはあなたから聞いて知つてゐます。でその一人の人に捧げてゐると仰つしやるのは?

N 子 ……………

令嬢 話して下さい?

N 子 わたしを救つて呉れた人です。

令嬢 あなたは——その人に……捧げてゐらつしやる……?

N 子 その人はわたしに本當の生きる欲望を與へてくれた。生きるこの意味を與へてくれた。



わたしは總てを捨てて悔いませぬ——その人の事業のために……

令嬢 あなたはその人を愛してゐらつしやる……？

N 子 ……………

令嬢 それでその人の事業の爲に……

N 子 (うなづく。)

令嬢 (沈黙。) 話して下さい。N子さん……わたしを信じて下さい。

N 子 (赤くなつて) わたしはたゞ一つの事業の爲に働きます。それはあの人のもので、わたしのもの……そして人類のもの——

令嬢 仕事があなたたちを結びつけた——そして總てを捧げた強い愛が生れた……心からお祝ひ致します。

N 子 (急に憂鬱になる。) 違ひますわ。わたしは一人で——心の中で捧げてゐるのです。

令嬢 (驚ろく。) ではお心も……お打ちあけにならないで。

N 子 (涙ぐむ。) 事業に捧げるのはあの人に捧げるのだと思つてゐます。

令嬢 ではあなたは淋しいでせう。遠くにお離れになつて——

N 子 ええ。でもわたしたちは仕事を大事にしなかりません。わたしたちは闘つてゐるものです——あの人はさう言ひました。あの人はわたしをこちらに勇ましく送つてくれました。わたしが立つ時に波止場に送つて来てくれました。(間。) あの人は強い——わたしはたうとう得言はずに別れました。

令嬢 でもその人も屹度あなたを——

N 子 (首を垂れる。) わたしは幸福ではないのです……多分それはわたしに來ないやうに思へるのです。

令嬢 そんな事はありません。待つてゐらつしやい！ 望みをもつて——

N 子 わたしは生きませう。弱くなつてはなりません。(立ち上る。) 同情はわたしを弱くします。わたしは決心してゐるのです。世の中の娘の願ふやうな事を願つてはならないと——



令嬢 願ひなさい！ それはあなたに許される事です。何もそれをあなたに止める事は出来ません！

(二人沈黙。)

N子 (耳を傾ける。) 弟が来ました。庭で口笛を吹いてゐます——今朝弟と會ふのは苦しい。

令嬢 勇氣をお出しなさい——うまくゆくでせう。

N子 やつてみませう——あの子の爲に辛抱ませう。(出て行く。)

令嬢 (數秒間沈黙。) 決心した人——淋しい愛……苦しい、張り切つた世界に生きてゐる。(部屋を歩く。) わたしたちは——力が足りない。(竈の扉をしめる。) わたしが本當に拜めるやうになる迄——二度とこの戸を開くまい。

博士 (登場。) お前は何をしてゐる。

令嬢 お父さんにお願ひしなければならぬ事がうまいます。

博士 なんだ。お前は大笑興奮しておいでをやうだ。

令嬢 お父さんは金澤さんと絶交なさらなければなりません。

博士 (落着いて) どういふ譯だ。突然に。(腰をかける。) 話してみなさい。

令嬢 金澤さんは恥知らずです。紳士ではありません。あの人とお交りになるのはお父さんの恥です。

博士 なぜだ。

令嬢 簡単に申します。穢い卑溜を搔きまはしたくはうまいませんから。あの人はある女を弄んで子を産ませて捨てたのです。その子がN子さんです。

博士 (沈黙。)

令嬢 もうよろしうういませう。今晚あの人をお招きになる事は止して下さい。

博士 確かな事實か。

令嬢 確かです。N子さんから聞いたのです。

博士 (考へてゐる。)



令嬢 勿論お父さんは絶交なさいませう。

博士 いやもつと考へて見ねばならん。

令嬢 何も考へる事は御座いませぬ。事實は明かなんです。あの人をこの家から斥けて下さい。

博士 未だ早い。事實が未だはつきりしてゐない。又どんな複雑な事情がひそんで居るかも知れない。

令嬢 (興奮して) 事情はもう解つてゐます。一刻も早く絶交して下さい。研究所の寄附も直ぐに拒絶して下さい。

博士 落着きなさい。俺はそんな輕率な事はしたくない。人間一人の名譽を潰す事なんだ。

令嬢 (激して) 名譽ですつて？ あの人に名譽があるでせうか。あの方は斷じてそれを持つてゐません。わたしはお父さんが直ぐにわたしに同意して下さいと思つてゐました。わたしは失望しました。

博士 わしは事實に嚴肅になる。未だこれだけではそれだけの處置をとるには不用意だ。

令嬢 N子さんから詳しく聞いたのです。

博士 一方だけ聞いたのでは解らない。

令嬢 でもあの方は自分の娘を十八年間も捨てて置いて見向きもしないのです。Nさんが何を考へてゐるとお思ひになります？ それは自分の父に復讐する事です。本當に恐い事では無いませんか。

博士 恐るべき事だ。(間。) それだけ慎重でなければならん。事實は複雑なものだ。

令嬢 お父さんはあの人をこの儘お許しになるのですか。交りを續けるお積りなのですか。

博士 事情がはつきりする迄はきめられない。男と女との争ひでは男に同情す可き場合も少ない。母親が娘に復讐の精神を吹き込んだと言ふやうな――

令嬢 (強く遮る。) Nさんの場合には決してさうでは無いませぬ。それはもう解つてゐるんですから。それはあんまり可哀相です。あなたは何故もつと金澤さんの罪惡をお責めにならないのです。



博士 (娘の顔を見る。) もつと冷静になれ——俺は學者だ——お前はかはつておいでのやうだ。

お前のこれ迄の立場をどうした——お前は他人の罪を裁いてもいゝのか。

令嬢 或る變化が——劇しい動搖が今日わたしの心に起りました。わたしは罪を憎まずにはゐられなくなりました。裁く事を知らない赦しは無力なものではないでせうか。なぜと言つて、今の場合、わたしは赦すよりも裁く時にわたしの魂が力づきますから。わたしが今赦すと申しますなら、それは生まぬるい偽善になりませう。

博士 わしは感情よりも、もつとしつかりしたものに頼る。お前は今揺らいでおいでだ。わたしはお前について動くことは出来ない。

令嬢 お父さんはどちらにもつかない——中立的な態度をおとりになるのですか。もつとはつきりどちらかの味方をして下さい。

博士 わしはもつと確かな世界を索める。悪を憎む事を知らないのではない。それに金澤は今後悔してゐるのかも知れない。お前は今裁く心に充ちておいでのやうだ。誰も他人の罪に對

して同情の位置に立つてはならないのか？ わしが觸れた限りでは金澤は未だ人の好い紳士としかうつつてゐないのだ。有態に言へば、わたしは彼の人を普通の人間以上に尊敬してはゐない。だがそれ以上に我々が他人に要求する権利があるだらうか。

令嬢 お父さんは市民に對する愛の事をおつしやつてゐらつしやるのでせう。ですが、あの人は普通の市民でせうか。自分の娘を一度も抱いてキスしてやらなかつた一人の平凡な市民がございました？ それにわたしは人の好い紳士と言ふものを非難せねばならない事は今は切に感じます。無神経で、云はば魂のめぐりが悪い爲に、肥つて上機嫌である紳士——自分がした事の爲に他人がどんなに苦しんでゐるかを知らずにゐる呑氣者——さう言ふ人の一人としても、あなたはあの人に對してもつと厳しくなさるべきです。

博士 わしは金澤に對して丁度相當した態度をとりたい。事實が要求する處置をとりたい、それが正義だ。お前は激した感情の中で考へておいでだ。わたしは公平に考へる——未だ早い。事實が揃つてゐない。



令嬢 わたしは残念です。お父さんの冷淡なのが淋しうムいます。

博士 わしは軽率な事は出来ぬ。殊にまはりのものが興奮してゐる時にわしが沈着を失つてどうする。齒車が一分違つても機械は役に立たないのだ。

令嬢 わたしは正義の齒車に訴へるのです。犯かされた罪惡が罰せられない事を怒るのです。

博士 お前のお言ひの事を考へて御覽。お前は昨日迄言つた事と反對を言つてゐる。どんな罪でも赦す恵みはどうしたのだ。

令嬢 ……

博士 わしはお前に反對するつもりではない。だがわしには異様に聞える。お前はいつ、どうして立場を換へたのか。わしらの仕事ではさういふ飛躍は許されない。

令嬢 生きた經驗が——魂の惱みの訴へがわたしの胸をつらぬいて！

(劇しいソツクの音。)

令嬢 N子さんです。

博士 又あとにしよう。よく考へてみて。早やまつてはいけない。(別の入口から退場。)

令嬢 (扉を開ける。)

N子 (興奮して這入つて来る。) とても我慢出来ません。わたし本當の事を言つてしまはなくちや——

令嬢 どうして? も少し忍耐出来ませんか。

N子 わたしはやつてみたのです。出来るだけ平氣をつとめて——けどとても駄目です。あの子は知らずにわたしを思つてゐるんですもの。今日から急にからまつて來だしたんです。

令嬢 ……

N子 無理はありません。わたしがさうなるやうにし向けたんですから。

令嬢 (溜息をつく。) そこをなんとか出来ませんか。弟さんが若し知つたら——

N子 さう思つてやつてみるんですが。いくら恥知らずでも、あんなにむきになつてゐるものに、しらばくれた態度はとられません。可哀相に弟はおこり出しさうになつてゐるんです。



令嬢 でも本當を知つた時の苦しみと較べれば――

N 子 言つて了ひませう。どうせ解らずにはおかないのです――事實の命令です。

令嬢 弟さんの小さい心臓が此の眞實を背負ひ切れるでせうか。

N 子 やつて見ませう。一と思ひに――

令嬢 (沈黙。) この上あなたに嘘をつけとは勧められません――弟さんは何處にゐるのです。

N 子 彼の方の部屋にゐます。今にこゝに來るでせう。(顔が硬ばる。) 今度はすばとあの子の胸を突き抜いてやりませう。

令嬢 あゝ神様! 罪のないあの子がなぜこんな目に遭はなければならぬのです?

(ノクツの音。)

N 子 あの子です。

令嬢 では席をはづしませう。

N 子 (自信を失つたやうに) 困つた時には助けて下さい。あなたも一緒にあの子に話してやつて

下さい。そして勵ましてやつて下さい。(顔色が悪くなる。) でも出来るか知ら。

令嬢 勇氣を出してやつて御覽なさい。必要な時には私を呼んで下さい。(退場。)

少年 (登場。)

N 子 (堅くなる。)

少年 (ぷり／＼して) 姉さんはひどい。僕あいやだ。さつきから急に變にするんだもの。

N 子 ……………

少年 ちつとも譯を言つてくれないで(N子の顔を見る。) あゝあなたは怒つてるんですね。何が腹が立つたんです。言つて下さい。僕が悪かつたのならなんでもあやまります。

N 子 さうではありません。

少年 あなたは泣いてゐる。どうしたんです。姉さん。(N子に抱きつく。)

N 子 (思はず少年を抱きしめる。)

少年 僕が決心しないからそれであなは悲しいんでせう。それならもう泣かないで! 僕は



決心しました。何時でも姉さんと逃げます。姉さんと二人で何處か誰も居ない處へ行つたら  
どんなにいゝだらう……僕はさう思ふんだ……それでもういゝでせう。

N 子 えゝえゝ。

少年 ではもう泣かないで機嫌をよくして下さい。

N 子 もう泣きはしません。

少年 僕はお父さんやお母さんの事はかまはない。何處へでも二人で行く。(燃えるやうな  
目つきをして) 僕は姉さんの言ふ事を聞いたのだから、姉さんも僕の言ふ事を何でも聞いて  
くれるでせう。

N 子 えゝなんでも聞きますよ。あなたの言ふ事なら。

少年 それではねえ――

N 子 えゝ。

少年 (益々堅く抱きついて) 僕をキスして下さい。(N子の胸に顔をうづめる。)

N 子 (青ざめ、目を閉ぢ、そつと少年をはなす。)

少年 ……

N 子 許して頂戴。

少年 僕は歸ります。(駈け出さうとする。)

N 子 (少年の両手を握つて自分の前に坐らせる。涙がぼろ／＼落ちる。)

少年 どうしたんです。どうしたんです。

N 子 驚かないで頂戴。しつかりして居てわたしの言ふ事を聞いて頂戴。あなたはわたしの弟  
なんです。わたしの本當の弟なんです。わたしたちは本當の姉弟なんです。腹異ひの――

少年 (N子の手を振り離し立ち上る。)

N 子 びつくりするのは尤もです。あなたのお父さんが十九年前に或る女に手をつけてわたし  
を産ませたのです。

少年 (青ざめる。) そ……それは本當の事ですか。



N子 本當です。今日迄わたしは隠してゐました。赦して下さい。でももう黙つてはゐられません。

少年 僕は……僕は知らなかつた——そんな事があり得る事だらうか。

N子 赦して頂戴。姉さんがあなたにしかけてゐた悪い、悪い事を！

少年 (突然啜り泣く。)

N子 わたしはなんと言つていゝか解りません。わたしの内には色々なものが沸<sup>たぎ</sup>り返つてゐるのです。あなたをびつくりさせまいと思つて、色々考へました……でもこの上嘘についてはゐられません。

少年 (泣きつゞける。)

N子 しつかりして下さい、この眞實を負つて下さい。いくらいやでも事實を換へる事は出来ません。

少年 (床の上に倒れる。泣き聲が段々高くなる。)

令嬢 (ドアを開けて登場。) あなた……あなた……

少年 ……

令嬢 しつかりして下さい。驚いたでせう。でも今はあなたの一生の一番大事な時です。勇氣を出して耐へて下さい。

少年 (身を起す。) 僕は……僕は何んにも考へられない——世界が眞暗になつた。

令嬢 驚いたでせう。もつともです。でももう泣いてる時ではありません。(聲を勵ます。)あなたの全身の力を集めて下さい。この事實を踏みしめて下さい。そしてこれからあなたの本當の姉さんと新しく生きる道を見つけて下さい。

少年 僕の父が僕の知らぬうちに穢<sup>けが</sup>らしい事をやつてゐた……僕の本當の姉さんが何にも知らない僕に恥かしい事をしかけてゐた——そして僕にそれを我慢しろと他人<sup>ひと</sup>が言ふ——

N子 赦して頂戴。姉さんはお父さんが憎いばかりに、可愛い、可愛いあなたを犠牲にしようと思つたのです。



少年 (突然。) 姉さん、逃げて下さい！ 僕と一緒に何處かへ行きませう。僕はもうあんな家へは歸りたくない。

N子 ……………

少年 さあ逃げませう。僕は決心してゐます。今となつては僕はその方がどんなにいいだらう。誰もゐない所へ行つて二人で仲よく暮らませう。

令嬢 それはいけません。今そんな事なさつては駄目です。

少年 でもほかにどうするんだ？ 僕はそれしか考へられない。さあ姉さん、僕と逃げて下さい。勿論あなたはさうしてくれるでせう。

N子 待つて頂戴。わたしの事はかまはないが、それではあなたが――

少年 僕はかまひません。

N子 でも……

令嬢 (N子に) そんな事なさつてはいけません。

少年 姉さんはいやなんですか。

N子 (沈黙。)

少年 なんだ！ 皆して僕を臺無しにするがいい。僕はもうどうなつたつてかまふもんか。

(駈け出す。)

令嬢 (扉口迄追ひかける。) あなた……あなた……

N子 あゝ。どうしませう。弟は死ぬでせう。弟は死ぬでせう。

令嬢 あゝ。(額を抑へる。)

N子 待つておくれ！ わたしも行くから……お前一人やつて、わたしがどうするものか。  
(後を追ふ。)

令嬢 N子さん。N子さん……あゝ。(両手をしぼる。向ふに青年の姿を見つける。) あなた……早く来て下さい！

青年 (登場。) どうしたんです。



令嬢 二人を止めて下さい。N子さんと弟さんが出て行きました。二人は死ぬかも知れませ  
ん。

青年 弟さん？ どういふ譯で——

令嬢 譯はあとで話します。二人を止めて下さい。早くして下さい！ 裏のコートの方へ……

青年 (急いで出て行く。)

令嬢 (眞青になつてソファに倒れかゝる。)

### 第三場(夢の場)

ヒース。 岩が多い。所々に灌木。灌木は花咲き、下草が美しい。川めぐり流る。川を隔てて向ふに  
緑の草丘。今太陽が出たところ。娘赤いスカートの付いた白の服装で、岩の上に腰をかけ、太陽の登  
るのを見てゐる。

娘 日が登つた。金色の箭が野山を射る。川は喜こんで流れ、草地には緑がもえる。露が光  
つてこぼれてゐる。わたしは歩いてみよう。(歩き廻る。向ふの森から鳥の群が空に飛びたつ。)お  
寺の塔の風見が光つてゐる。朝の鐘が今に鳴るのだらう。(川岸に出て川上の方を眺める。)向  
ふの向ふの方から川が流れて来る。限りなく、膨れて、流れて来る。生命いのちの流れだ。太陽は  
丁度川上の眞向ふにくるめき乍ら燃えてゐる。ケルビムや、セラフイムが金色の光の中から  
踊り出して、流れに飛び込むやうにみえる。(川下に向く。)何處迄流れてゆくのだらう……  
川下の瀬が鳴つてゐる。(川岸にそうて下る。)こゝに榎の木が立つてゐる。すらりとして未  
だ若い。(樹の肌をなでる。)こんもりした親しい陰がわたしの心をひく。坐つてみよう。(草  
の上に坐る。)下草がきれいなこと。星のやうな小花の簇り……(うつとりとして空想に耽る。)  
わたしはジャン・ダークだ。わたしは嚴かで誰も近寄れない。(又考へに耽る。)おや、わた  
しはテレシヤの事を思つてゐる。さうだ。わたしはやさしい娘だ。(夢中で叫ぶ。)わたしは  
薔薇の雨を降らしたい。此の野に一ぱい赤い薔薇の雨を。(ふらくくと立ち上る。草の上を歩く、



やがて岩の上に腰をかける。沈黙。わたしは淋しくなつた。わたしの魂は何かを欲つてゐる。わたしのスカートが露にぬれて紅くにじんでみえる。さうだ。七汐も八汐もぬれるといふ。(立ち上る。灌木の花を歩き乍らつむ。——うたふ。)

私は灌木の花をつむ

私はそれを環たまきに貫く

だが私はそれを川に流すまい

あの人は川上にゐるのだから

(白鳩が空から舞うて下りてくる。娘白鳩を抱き上げる。)

娘 可愛い使ひ。さあ、わたしはお前を放つ。川上に飛んでおゆき。あの人の處へ……

(突然ピストルの音。白鳩が血に染まつて地に落ちる。)

娘 (叫ぶ。) 誰です。わたしの白鳩を撃つたのは!

(一人のぼろ／＼になつた労働服を着た、がつしりとした體軀をした男、顔色青ざめた黒服袴の女工を

背負つて現はれる。工女は左の手に赤い旗を持ち、右手にピストルを握つてゐる。)

工 女 わたしが撃つたのです。

娘 なぜ私の鳩を殺したのです。

工 女 (冷笑を浮べる。) わたしは憎んだから!

娘 なぜ憎むのです。

工 女 わたしのこの血の氣のない顔色が見えませんか。黒いがさ／＼した着物が——埃だらけの髪が……(悲しげにうたふ。)

うちが貧乏で十二の年に

うられて來ました此の會社

一番なつたら起こされて

二番なつたら身の支たく

三番なつたら工場よ



何の因果で総掛習<sup>なま</sup>た  
たまに残るは骨と皮

娘 わたしはあなたに同情します。あなたはわたしの姉妹です。

工女 そんなものはいりません。旗とピストルを持って、わたしたちについていらつしやい。  
あなたの妹を助ける爲に！

娘 ピストルを持つて？ あなたは人を殺すのですか。わたしは總てのものを愛します。

(何か言はうとする。)

(目くばせして制する。) 戦ひだ。俺たちはいそがしい。

工女 夢をみてゐらつしやい。

男 (工女を背負つた儘無言にて川を渡り初める。)

娘 待つて下さい。わたしも連れていつて下さい！

男 (返事をせず。大股に岩を踏みしめて、川を渡つて退場。)

(暗轉。)

### 第四場

令嬢の部屋。 第二場と同じ。令嬢がベットに寝てゐる。N子はその側の椅子に腰をかけ寝顔を見  
守つてゐる。

令嬢 (かすかにうなり聲を立てる。)

N子 (揺り起す。)

令嬢 (目を開く。ベットの上に起きる。)

N子 あなたうなされました。

令嬢 (夢のあとを追うてゐる。)

N子 如何です？



令嬢 (ベットから離れる。) わたしは起きます。もういゝのです。

N子 かまひませんか。

令嬢 あまり驚いたので頭がふらくしただけですから。

N子 心配をかけました。

令嬢 いゝえ——わたしは弱い——駄目です。

N子 (沈黙。)

令嬢 あなたはわたしを笑つたでせう。

N子 (首を振る。) いゝえ、あなたが清いからです。私の心臓は虐められてゐる、恐しいことにも驚ろかぬやうに。それでもさつきは驚きました——弟をなくさめて家へかへすのはなかなかでした。

令嬢 (黙然として) 酷い事です。あなたにお詫びせねばなりません。あなたの秘密を他人にあばいたことを……

N子 止むを得ません。

令嬢 あゝ。私たちのまはりはもう汚れてしまつた!

N子 (冷やかな微笑。) わたしさつきからあなたの寝顔を見てゐました。きれいだと思つて。でも御免なさい。わたしにはある憎みに似たものが起りました。

令嬢 わたしの夢はその通りでした。

N子 赦して下さい。わたしはあなたを愛してゐます。でもやつぱり反感が起きますのです——あなたがはつきりわたしの味方だと思へたら……

令嬢 わたしはもうあなたの味方です!

N子 本當にですか。

令嬢 あなたの憎みがわたしに燃えつきました。父の冷淡が一層わたしに悪を憎む心を湧きたせました。あなたにお約束した事を父にさせる事が出来なかつたのは實に面目がありません。でもわたしはそれによつてあなたの大きな欲望を捨てさせたのです。あなたの目的を犠



牲にさせたのです。父は公平と言ふでせう。然しわたしは思ひます。どちらにも組しない態度が公平と言ふものなら、それは熱情のない冷淡ではないでせうか。

N子 さうです。わたしはさういふ立場があり得るとは思ひません。わたしたちが一つの強い欲望を持つとき、わたしたちはそれに熱情をもつて傾いてゐます。わたしたちの味方でないものはわたしたちの敵です。その中間はありません。

令嬢 わたしは夢みる事がいやになりました。あの小さい弟さんを撃つた運命は決して夢ではありません。生々しい現実です。醜い、眞黒な塊りです……わたし一人が美しい考へに耽つてゐる事が出来ませうか。

N子 わたしの味方をして下さい。わたしたちのために立つて下さい。わたしが一番悲しい事は——腹だたしい事はわたしたちの姉妹がわたしたちの苦しみを脇見してゐる事です。どうしてわたしたちを助けるために立ち上つてくれないのでせう。さう思ふとわたしは憎みが起る。甘い、白粉臭いあの人たちの考へを嗤ひたくなる——

家政母 (登場。) N子さん、すぐにいらして下さい。手が足りませんから。

N子 (答へない。)

家政母 随分いそがしいんです。お客様に失禮になります。

N子 わたしはいやです。さつき申した通りです。

家政母 (憎みの目付を以て数瞬間立つてゐる。やがて去る。)

N子 わたしがあの席へ出られるでせうか。出ないのはまだましでせう。(あざけるやうに) 若し出たら、それこそ集りは臺なしにならずにはおきますまい!

青年 (登場。) あなたは起きてゐる……一寸出ていらつしやい!

令嬢 わたしは失禮致します。

青年 客があなたの事を度々訊きます。先生が困つてゐられる——で僕は呼びに来たのです。

令嬢 わたしは出ません。出られません。

青年 なぜです。あの席にゐる客は金澤さんだけではありません。尊敬していゝ教授たちもゐ



ます。

令嬢 わたしは残念です。あなた迄が悪人の肩をもつのですか。

青年 僕は悪を憎む。だが僕は先生の言はれる事が少くとも今の場合正しいと思ふ。僕は先生の立場を同情するのです。

令嬢 N子さんには同情しないのですか。

青年 勿論同情します。然し僕はまはりに裁くものばかりがある時には赦すものになりたい氣もする——

N子 (冷笑。) わたしは同情して要りません。わたしは何處迄も裁きます。告訴します。

青年 赦すものは誰も居ないのですか。

N子 卑怯者！

青年 卑怯者？ あなた方が赦す時僕は裁くだらう。だがあなた方は裁きに充ちてゐる。あなた方はもう報いを得た。誰がN子さんや弟さんに同情しないでゐられるか。だがN子さんは

それを拒む。お父さんに禍ひをのぞむ。無關係な他の人をまきぞへにする。僕は正しいとは思へない。

N子 ふん。(冷笑する。) 又一人公平な立場を振りまはす人がゐる。彼の名は冷淡だ！

青年 あなたはひねくれてゐる。僕はあなたに同情する點では——

N子 (遮る。) わたしは同情して要りません！

青年 それは僕の自由だ！

(沈黙。)

令嬢 今夜はわたし本當に不幸な氣がする。あちらではお父さんがわたしのお願ひもきかないで、わたしの嫌な客とテーブルを挟んでゐらつしやる。こゝではわたしの信じる友がわたしの愛する人と争つてゐる。

青年 あなたがたは運命と言ふものを思はない。運命の不調和を個人の責任に歸して了はうとする。それは不謙遜ではないだらうか？



N 子 わたしはさういふ考へ方はとくに捨てました。それは人間を不正に對して無氣力にさせる——

青年 あなたは不正、不正と言ふが、僕はそれが心におちない。何處かに僕の魂が肯んじない所がある。僕はその言葉に對して心から頭が下らない。

N 子 不正とは何ですか？ それは不正を受けてゐるものに初めて解る事です。その言葉を正しく用ひる事の出来るものは被害者だけです。わたしはもうそれを腹の底から知つてゐる。だから、初めからあなた方の階級には期待しなさい。ブルジョアは敵、インテリゲンチヤは中立……あの生ぬるい、わたしたちが敵よりも未だ輕侮してゐる連中です。ブルジョアは力を持つてゐる。爪のある虎だ！ だがインテリゲンチヤは恐ろしくもなければ頼みにもならない。わたしたちはさう言ふ人達を無視してゐる。

青年 人間を無視する事は出来ない！ 靈魂を持つてゐるものを輕侮するものは僕の敵だ。それと較べれば他の事はまだ小さい。あなたは階級を見て人間を見ない。僕は人間を見て階級

を見ない。いや僕は行爲さへも見ない。もつと奥にある人間そのものを見る。魂を！ 一つの罪のある行ひをしたものがそれをせぬものより必ず悪いとは僕は思はない——金澤さんがどれだけの裁きに償してゐるか？ それはその人間の如何で可まる——僕は未だそれを知つてゐない。

N 子 では傷つけられたものはどうするのです。その受けた害の償ひは？

青年 それは僕には解らない。だがそれは何等かの爲方で償はれるべきものだと思ふ——

N 子 さうです。わたしたちの叫びはその要求から起るのです。あなたはその方法を知らないと仰つしやる。ではあなたは何も私たちに向けて仰つしやる權威ちからはないではありませんか。

青年 (沈黙。)

N 子 わたしたちはその方法を握つてゐるのです。

青年 僕は握つてゐない——あなたは握つてゐる……それは本當だ。だがあなたが握つてゐるのは眞理ではない。



N 子 (冷笑する。) 眞理とはなんでしたつけ。

青年 (興奮する。) それは僕が求めてゐるそのものだ。僕がその爲に全力を盡してゐるそのものだ。

N 子 わたしにはつきり解つてゐる事はあなたがわたしたちの救ひ主でないと云ふ事です。あなたや先生は眞理をさぐる選ばれた人でもありません。ですが權威者ではない。眞理を握つてゐないものはわたしたちを救ふ力はありません。

青年 何處にさういふ權威者がゐるのだ？

N 子 (非常に熱情的に) 一人ゐる！ それはわたしの救ひ主です。あの人はわたしのキリストだ！

(沈黙。)

N 子 (突然。) わたしは失禮します。(劇しくドアを開けて出て行く。)

(沈黙。)

青年 あなたは出席しないのですか。

令嬢 わたしは今晚は出る氣になれません。

青年 僕が呼んでもですか。

令嬢 ……

青年 僕にはそれだけの資格はないのでせうか。

令嬢 N子さんに對してそれは出来ません。

青年 僕は残念だ。

令嬢 わたしも残念です。わたしはあなたが今晚わたしの味方をして下さらなかつたのは本當に失望しました。わたしはいつも思つてゐました。正しいものに味方する事でわたしたちの愛を燃やす事が出来ると。その機會が來ました。ですのにあなたはわたしにその喜びを與へて下さいませんでした。

青年 僕はあなたがもつと自分を守る事が出来る人だと思つてゐました。あなたに僕が一番期



待してゐるものをあなたは示して呉れませんでした。僕はもつとあたらしいやり方があらうと思ふのです。

(沈黙。)

令嬢 あの人は燃えてゐる……何かをしつかり握つてゐる。

青年 僕は實に淋しい……二重にも三重にも——僕はあなたには正義に味方する事の出来ないものとして見られてゐる。N子さんには實力を握つてゐないものとして扱はれてゐる……だが僕は一番正しい態度を取つてゐる。

令嬢 あの人のする事は内から充實してゐるやうに見える。父にもあなたにもあれだけの充實をわたしは見る事が出来ません。これはわたしにとつて本當に残念な事です。でもわたしにはどうしてもさう感じられるのです。

青年 あなたはN子さんに影響され過ぎる。

令嬢 でも何故でせう。あの人はわたしをぐい／＼引つぱつて行くのです。

青年 今の時代では善良な人は、只自分が幸福であるといふ事だけで良心が傷つくのだ。だがそれは決して素直な事ではない。あまりに自信のないことだ。

令嬢 ……

青年 もつと確乎としてゐて下さい。暗示にかゝらないで下さい。

令嬢 あの人は暗示をかけるだけの力を持つてゐます。然し他の人はさうではない。尊敬してゐた父は今、厳しさの足りない人のやうに見え出しました。そして——

青年 解つてゐる。僕は權威ちからのない人間のやうに見える——あなたはかう言ひたいのだらう。それは僕の痛い所に中つてゐる。僕は確かに未だ權威を擱んではゐないから。(唇をかむ。)

令嬢 ……

青年 僕は孤獨を感じる……だが僕は他人の承諾を強ひるには自負心を持ちすぎてゐる。若しその爲に僕があなたにとつて價の少ないものになつたのなら、僕はいさぎよくそれをお受けします。



令嬢 さうではありません。だから私は淋しいのです。でもわたしはわたしの心の内で敗れた気がするので。その感じをどうともする事が出来ません。あの人は言ひました。わたしは救ひ主を持つてゐる。キリストを持つてゐると――

青年 (眞赤になる。) 僕はこゝにゐる事が出来ません！ (涙を含んで退場。)

(沈黙。)

令嬢 わたしたちは負けた。何故？ (考へる。) 悩みが足りないのだ。苦痛の経験が――

少年 (思ひに悩んだ顔付にて登場。) 僕には解らない。僕はどうすればいいのだ？

令嬢 ……

少年 姉さんと別れて家へ歸つて見た。お母さんが着物を用意して僕の歸りを待つてゐて呉れた。今晚お呼ばれに行くのだからと言つて。お母さんは青白くて影のやうだ。優しくて時々泣いてゐる。お母さんはちつとも悪かあないんだ。お父さんがこゝして今晚連れて行つてやると言つた。僕の顔色が悪いと言つて心配してゐた。僕はお父さんの顔を見た。この人

がそんな悪い事をした人間だつて？ 太つて人のよささうな、にこ／＼してゐるこの人が……僕は家へ歸つてから又逃げ出す氣が挫けた。だつて一日でも僕がゐなければお母さんは泣くだらう。お母さんに罪はないんだ。僕は父の罪を責めてやらうと思つて歸つた。だがお父さんの顔をみると僕は氣が抜けた。「お前は顔色が悪い。病氣ではないか。餘り勉強すな――」これが僕が憎んでゐるお父さんが言つた言葉だ。僕は直ぐ姉さんの事を思つた。僕は泣くにも泣けなかつた。なんと言ふ事をお父さんはしてくれただらう！ 僕は唯なさけなくなつて家を出た……教へて下さい。一體僕はどうすればいいの？

令嬢 お母さんを大事にしてお上げなさい。あなたは家を出てはいけません。

少年 姉さんは……苦しい姉さんはどうするの？

令嬢 姉さんは強い。自分で苦しみを負つて行きます。

少年 僕も強い。僕だつてお父さんとたゝかへる。でもお父さんは僕を可愛がつてるんだ。自分を可愛がつてくれるものを憎んでもいいの？



令嬢 (沈黙。)

少年 僕は家にゐるのなら姉さんの事を黙つてはゐられない。そんな事が出来るものか。お父さんやお母さんの顔を毎日見てゐて知らぬ顔が出来るものか。何と言つてお母さんに話したらいいの？ お母さんは怒るだらう。いや怒りはすまい。お母さんは何でも忸へるから――

令嬢 お母さんには今話さない方がいゝかも知れません。

少年 そんな事をしろと言ふのですか。僕に嘘をつけと言ふのですか。僕だつて強い。やつてはみる。でも僕はきつと苦しい顔をするだらう。お母さんが心配する。何時もそれを訊く。そして僕は知らぬ顔をしてゐるのか？

令嬢 (沈黙。)

少年 僕がお父さんを責める。するとお父さんがもうあの家へは行くなと言ひ出すだらう。姉さんに會はせないやうにするだらう。でもそんな事が出来るものか。僕はどうしたつて来る。姉さんはこゝにゐられなくなる。ぢや僕も家を出すにはゐられない。

令嬢 あなたが出てはいけません。さみしいお母さんはどうなさるんです。

少年 ぢやどうして姉さんと會ふの？

令嬢 そつとわたしの家で――

少年 お父さんに言つて了つたらそれは駄目です。でも言はずには僕は居られない。

令嬢 たとひしばらく會はずにゐても――あなたたちは強いのでせう。

少年 (唇を噛む。) 僕の事ならやつて見る。でも姉さんを一人ぼつちにして置かれるものか。

令嬢 ………

少年 姉さんはこゝにはゐられなくなる。姉さんは行つて了ふだらう。

(沈黙。)

少年 みんなよくする事は出来ないの。姉さんはお父さんの子ぢやないの。だからお父さんは姉さんを僕のやうに可愛がればいゝ、お父さんは悪い事をした。だからそれをお詫びすればいゝ。そしたら姉さんだつて赦すだらう。お母さんにも話してしまはう――そしてみんな仲



よくしたらいゝぢやないの。

令嬢 (涙ぐむ。) それが本當です……さう出来さへするなら!

少年 なぜさう出来ないの。なぜ本當の事が出来ないの。

令嬢 「信仰薄きものよ……」も一度この聲がわたしに強く響いて呉れ……なぜわたしには力がないのだ……

(二人沈黙。)

N子 (考へ乍ら歸つて来る。) わたしはもうお別れしなければなりません。

令嬢 どうして?

N子 もうその時が来てゐます。

令嬢 そんな事はありません。

N子 わたしにははつきり解ります。すべての事情がさうなつてゐるのです。

令嬢 家のものとの關係なら氣にしないで下さい。祕密が解つた事はあなたの不名譽ではあり

ません。あなたは氣の毒な被害者です。傷つけられたものがその上にそれを恥ぢねばならぬいでせうか。

N子 いゝえ決して! でもわたしにはすべての事がリアリスチックに解るのです。事柄はあ  
るべきやうに起りはしません。あつてはならないやうに起ります——わたしはお別れせねば  
なりません。

少年 歸らないで——姉さん歸らないで。

N子 歸りたくはない……でも仕方ありません。

少年 姉さんが歸るなら僕も家にはゐない。僕も一緒についてゆく。

N子 あなたは家にゐらつしやい。さつきも言つた通りです。

少年 いやだ。いやだ。僕はどうしたつてついてゆく。

N子 家を出てどうするのです。誰があなたを養ひますか? どうして勉強するのです。

少年 僕は十六だ。なんだつてしてやつてゆく。



N 子 お母さんはどうするのです。あなたのために何もかも稼へて生きてゐらつしやるお母さん  
んは？

少年 ……………

令嬢 N子さんも一度やつてみませう。未だ道が残つてゐないとは言へません。本當の事が、  
本當にあるべき事が起らないとは言へません。弟さんがそれを言つた時わたしは本當にさう  
思つた。お父さんが悔い改めになり、あなたがそれをお赦しになり、父と娘とが愛し合ふこ  
と、姉と弟とが親の前で睦み合ふこと……そしてみんながよくなること……

N 子 (頭を振る。) 未だそんな事を考へてゐらつしやる。それがあなたたちの空想なんです。

さう出来るものならわたしだつて——(涙をこぼす。) 本當にわたしはもうそれがはがゆい。  
その美しい考へが腹だたい……御免なさい。(涙を拭く。)

令嬢 でもそれは弟さんの願ひ……人間の願ひ……ぢやありませんか。

N 子 その通りです。けれど出来ない願ひをいつまで空想してゐられませう。今の世の中では

本當の事は起る事が出来ません。總てがやり直されない限り——あゝそんな望みはもう起し  
て下さいませうな。

令嬢 待つて下さい。あなたとお別れしなすむ爲に、弟さんを助ける爲にわたしはも一度  
やつてみませう。あなたとお別れするのはつらい……今となつてはあなたを一人遠くへやれ  
ないのはわたしも弟さんもおなじです。

少年 姉さん願ひです。待つて下さい。僕を救つて下さい。お父さんと姉さんとの間に挟ま  
つて僕あ苦しんでるんだ。(令嬢に) どうかやつてみて下さい。みんながよくなるやうに……  
……どうしてそれが出来ないんだらう？

N 子 (溜息をつく。) どうしてそれが出来ないんだらう？ わたしはそれを百度も自分に訊い  
て見た。だがやつぱり出来ないのだ。それが事實といふものなんだ。

令嬢 事實はさうです。でも願ひは……やつてみませう。少くとも父にも一度考へを翻へさす  
事は出来るかも知れませぬ。そしたらあなたはわたしの家に居て下さるでせう。そしてその



他の事も段々よくなる……

少年 やつてみて下さい。やつてみて下さる。

N子 (あきらめ切つた調子で) お別れを三十分ばかりのばす爲に……わたしは待つてゐませう……もう来るにきまつてゐる悲しみに——わたしは唯用意するばかりです。

令嬢 (目を閉ぢ、祈るやうな様子。) やつてみませう。(ドアをあけて去る。)

少年 (一瞬間沈黙。) 姉さん行かないで……行かないで……

N子 可愛さうに。(弟を抱く。) もうぢきお別れが来るのです——あなたの願ひはかなひはしなう。

少年 駄目でせうか。

N子 わたしには解つてゐる……もう覺悟をして下さい。あの方が甲斐のない努力をしてゐらつしやる間……わたしたちは別れを惜しませう。

少年 姉さん行つてはいや。行つてはいや。

N子 なにも言はないで。何も言はないで。(抱きしめる。) 凝つとかうしてゐませう。(眼をむる。) 事實は黙つて受けとるものです。  
(月が窓からさし込み二人を照らす。)

## 第五場

食堂。 長方形のテーブルをかこんで正面に主賓として金澤。その左右に教授A。教授B。助教授。

教授B夫人。主人側として博士と青年。家政母は脇に立つて居る。金澤の側の少年の席と博士の側の

令嬢の席は空いて居る。——食後。卓上に花と果物。茶菓。あけ放たれた扉から樹木と月光。

教授A なにしろい、仕事<sup>アルバイト</sup>を澤山出してる點でこちらの大學は誇つてもいゝかと思ひます。

助教授 (煙草に火をつける。) 國內よりも外國の方がこちらの大學は寧ろ有名なのです。

金澤 F市は昔から殷賑な都會でしたが、今日では我が國の西南部の最も重要な中心地です。



その上未来は無限と言つてもいゝ程豊富です。その潜勢力と言ふものは——例へばわたしが關係してゐる炭鑛の事業にしても——いや何しろあらゆる方面でF市の将来は目覚ましいものだと思ひます。

教授A (紅茶を飲みながら) いゝ夜だ……何か匂つて来るやうだ。

家政母 アカシヤの花でムいます。

教授B 五月だから——空氣が氣持よく濕めつて居る。

教授A あなたの鑛山迄鐵道がない事は甚だ不便ですね。

金澤 實はそれで事業のはかどる上に可成り支障があるのです。今では私もF市から山の事務所迄十里の道を自動車で往復してゐるやうな次第で——

教授B 輕便鐵道を計畫されたいでせう。

金澤 それです。貨車だけのでもと思つて考へてゐるのです。その際は何れ御相談致しますから、どうぞよろしく。

教授A さうなさい。お勧めします。さ迄困難な工程ではないでせう。

教授B (新聞をひろげて見る。) おや又坑内で瓦斯が爆發しましたな。

夫人 (眉を寄せる。) 坑夫が三十五名死傷、四十七名行衛不明……酷い事です。

教授A 不祥事だ。だが仕方がない——犠牲者だ。俺たちの間にもかういふことはある。I市の大學のM教授は化學實驗中、藥品が爆發して盲目になつた。

(沈黙。)

金澤 (新聞を一寸見る。) 時々かう言ふ事が起つて困るのです。なんとか方法はないもんでせうか。

教授B 天然に起るのは……今の所未だどうも——然しこの問題も我々が研究すれば今に防ぐ方法が見つかるかも知れません。さう言ふ點から言つても今度の研究所を寄附して貰つた事は結構な事です。

金澤 いや色々御世話になつて居りますので——それにかう言ふ事は實業をやつてゐるわたしど



もの義務です——時に御令嬢はお見えになりませんすな。

博士 少し気分が悪くて……我儘な奴ですから……

夫人 お嬢さんがゐらつしやらないとなんだか淋しう御座いますわ。わたし久し振りにピアノでも聞かして戴けるかと思つて楽しみにしてゐましたのに。

家政母 お嬢さんもその積りでゐらしたのですが……生憎おもてなしも出来ませんで。

博士 (青年に何か囁く。)

青年 (退場。)

助教授 (窓をあける。) 月だ。矛杉が仄青く煙つてゐる。

金澤 (ウエーファをつまむ。) 悴はどうしたかな。

家政母 お見えになりませんですね。

金澤 あとから直ぐ来る筈なんですが。

家政母 電話を掛けてみませう。(去る。)

博士 御子息はたちがよくて皆に可愛がられてゐますよ。

金澤 (にこ／＼する。) なにしろ一人でしてな……直ぐ来ると言つてゐたんだがな。(時計を出して見る。)

家政母 (登場。) もうとつくに家を出られたさうですが。

金澤 はてな。

夫人 お嬢さんに一寸でもお目に掛れませんでせうか。なんだか物足りなくて……

博士 (家政母に) 御挨拶にだけ出るやうに。

家政母 はい。(當惑の様子にて去る。)

教授A 學會の講演の準備は出来ましたか。

博士 大體出来ました。君のは三體運動に就いてでしたね。

教授A さうです。今年は議論が多いでせう。

教授B ばき／＼論争するんだな。容赦なしに。



助教授 さうです。いつ迄もT市の大學の古い人達に遠慮する事は要りません。

教授A 學問の新しい、鋭い空氣を起さねばならん。

青年 (登場。博士に囁く。)

博士 (澁面をつくる。)

夫人 さつき庭を通つたのはあなたの息子さんのやうでしたよ。

金澤 (不審さうに) さうですか。

夫人 裏の方へ廻られたやうです。

金澤 今に此處へ來るでせう。どうもわたし位になると側に子供が居ないと淋しうムいましてな。あいつが側にゐて物を食つたり何かやつてるのを見てると變に氣持がよろしいのです。

夫人 でもそんなお年でもありませんね。

金澤 いや、奥さん。これでわたしは子供は可愛い方でしてな。

家政母 (登場。心の動搖を抑へ乍ら) お嬢さんが一寸先生にお話しがムいますさうで。

博士 みなさん一寸失禮します。(去る。)

金澤 (家政母に) 倅が來てゐませんでしたでせうか。

家政母 (どぎまぎして) はい。見えてゐるやうでムいました。

夫人 なにかお取り込みがあるやうで……

家政母 いゝえ……別に。

(沈黙。座が白らける。隣室で博士と令嬢と言ひ争ふ聲。)

家政母 一寸御免遊ばして。(去る。)

(教授たち顔を見合はせる。)

夫人 (夫に) もう失禮致しませうか。

教授B うん。

(興奮した令嬢と青ざめた博士と這入つて來る。)

博士 どうも失禮しました。



金澤 お取り込みがあるやうで。失禮致しませう。

博士 いやみなさん席にお着き下さい。

令嬢 (立つた儘で一言も發しない。)

博士 (娘に目くばせする。) 御挨拶をなさい。

令嬢 (沈黙。)

博士 (顔に朱をそぐ。) みなさんに失禮ではないか。

令嬢 みなさん失禮致しました。わたしはみなさんに申し譯なく思ひます。然し残念ですが、わたしはこの席に着く事が出来ません。

夫人 どうなさいました。

(突然ドアの外で二三人の激しい足音と言ひ争ふ聲。それに混じつて少年の啜り泣く聲。)

金澤 あれは倅だ。

令嬢 父はみなさんをふさはしくない集りにお招き致しました。こゝに一人紳士でない人が席

に着いてゐます。

(列席者一同立ち上る。)

博士 (青ざめる。)

青年 (令嬢を制する。) あなた——それは正しくない……

令嬢 (益々興奮して) その人はみなさんと席を同じくする名譽を持つてゐません。

助教授 それは誰です。

家政母 (飛んで来る。令嬢を制する。) あなた……あなた……

博士 失禮千萬な。何んたる事だ!

令嬢 わたしはあなたにお願ひしました。今晚の集りを呉れくも中止して下さるやうに。でもあなたはお聞き容れ下さいませんでした。わたしはお父さんの爲に惜しみます。

博士 お黙り。皆さんどうか席にお着き下さい。(令嬢に) 事柄は實にシリヤスだぞ!

令嬢 さうです。人間の運命にかゝる眞面目な事です。だからこそわたしはあれ程お願ひし



たのです。お父さんは餘りに厳しさが足りません。

博士 (嘆息する。) お前はもう發言して了つた。この上はもう名譽の證しが立てられねばならぬ。

教授A 名譽の證しが立てられねばならぬ。

助教授 我々は潔白だ。

教授B 我々の中誰が名譽のない人間なのか？

令嬢 今晚の主賓です。

金澤 (立ち上る。) 名譽の證しが立てられねばならぬ。

(ドアの外に劇しい足音。續いて言ひ争ふ聲。ドアがガタンと開けられ、少年がN子の手を引張つて飛び込んで来る。)

N子 (少年を制し乍ら續いて這入つて来る。)

家政母 (少年を抱き止める。)

N子 (慄ひ乍ら突つ立つてゐる。)

(一同立ち上る。)

教授A この女の人は誰です。

博士 わたしの助手です。タイピストの女です。

令嬢 これは金澤さんのお嬢さんです。

金澤 (色を失ふ。) わたしはこの女の人を知りません。

少年 (泣き乍ら) お父さん。姉さんです。姉さんです。

N子 いゝえ、わたしはあの人の娘ではありません。わたしは一人の職業婦人です。この家に雇はれてゐるタイピストです。

金澤 その通り……(慄ひ乍ら) わたしは見覚えがない。

令嬢 (激昂して) それは本當です。このお父さんは自分の子の顔を一度も見つた事もなければ抱いてやつた事ありません。キスしてやつた事も——その生ひ立ちを祈つてやつた事もあ



りません。

N 子 (唇を噛む。) わたしにはお父さんはありませんでした。

令嬢 さう言ふお父さんが若しあるとしたら、それは名譽のある人間でせうか？

教授達 さうではない！

令嬢 皆さんはさう言ふ人と握手する事を潔しとなさいますか？

教授達 俺達はしない！

助教授 裁きはどうかなるのだ？

教授A 訴へられたものは見覚えがないと言ふ——本人も子供ではないと證言する。(冷めたく微

笑する。)それで明白ではないか。

夫人 この上裁きをする事は必要で御座いません。また賢くも御座いません。

教授A 我々の名譽の證しは立つた。もう引き取つていゝだらう。

教授達 我々は失禮しよう。(各々帽子を取り夫人と共に沈黙の儘退場。)

(沈黙。)

金澤 わたしもこれで失禮します。

令嬢 お待ち下さい。(父に) お父さん、あなたのなさるべき事が残つて居ります。

博士 (黙然として居る。)

令嬢 お願ひしたやうになさつて下さい。研究所の寄附を拒絶して下さい。罪が償はれるまで

二度と握手せぬことを宣言して下さい。私はN子さんのために訴へます。

博士 (沈黙。)

少年 (家政母の手を振り切つて父のところへ突進する。) お父さん。姉さんを認めて下さい。罪を

おわびして下さい。

金澤 (沈黙。)

少年 姉さん知らないなんて言はないで下さい。自分の子を——姉さんはそれは難儀をして

育つたんです。



金澤 わしには名譽が要る。

少年 名譽が何ですか。それさへ捨ててしまへば自分の娘が抱けるんぢやありませんか。

金澤 わしは生きねばならぬ。

少年 お父さん、お願ひです。姉さんを認めて下さい。僕を可愛いと思つて下さるなら姉さんを——姉さんを——

金澤 わしは生きねばならぬ。わしは社會のなかに生きねば……

少年 おわびして下さい。此處に居る人はみんな善い人ばかりです。お父さんがおわびさへなさればみんな赦して下さいさるのです。

金澤 社會のなかに——

少年 おわびして下さい。悔い改めて下さい。

金澤 社會の……

少年 (父の足下に跪いてすゝり泣く。)

N 子 (突然ヒステリックに笑ふ。) はゝゝゝゝ。

(シヨックが一座を通過する。沈黙。)

N 子 すべての虚偽が此處にある。甘さが、滑稽さが此處にある。

(沈黙。)

N 子 卑怯で懶惰で此處の空氣は臭い。殉情で妥協で此處の空氣は甘酸っぱい。

(沈黙。)

N 子 高い廉潔——それは此處にはない。義しい非難——それも此處にはない。正直な懺悔——それも此處にはない。

(沈黙。)

N 子 無氣力が、腐敗が此處にある。窒息が。卑しむべきものが——すべてのブルジョアの的のものが此處にある！

金澤 (呻く。) 社會が……



N 子 社會が此處にある。その缺點のすべての面をさらして——怒りは、誠は此處にはない。苦しむものと幼いもの、只それだけが清い。それだけが人間だ。それだけがたましひだ！

(沈黙。少年の痛ましく哭く聲。)

N 子 幼いものよ、お泣きでない。お前の涙はむだに流れるから。もうそれは硬い心臓を動かしてはせぬ。大人の心は——ブルジョアの心は化石してしまつたのだ！

少年 お父さん。お父さん。

N 子 お父さんは私にはない。敵が私にはある。私のお父さんは私の敵！ お父さんは私を知らぬと言つた。では私も言はう。私はお父さんを知らないと。でも私は見た。私の父と敵とを一どきに。これが私の憎む敵なのか。でも私は愛します。これが私に生命をあたへてくれた父なのか。此のゆたかに肥えた、髪の少し白い立派な人が。でも此の人は私を抱いてはくれぬ。私を知らぬと言ふ。何んて冷めたい言葉だらう。知らぬとは……

(沈黙。)

N 子 でも私は惜しんでやつた。此の人に名譽を惜しんでやつた。此の人が社會に生きて行かれるやうに……(泣く。)

令嬢 あなたの耳には入りませんか。此の聲が、訴へが。あなたが捨てた赤ん坊は立派な娘に生ひ立ちました。あなたに愛を求めて居ます。なげいて居ます。

金澤 わしは社會に生きて行きたい。社會はわしのいのちだ。わしにも人の心がある。だがもう遅い。社會はわしの心に喰ひ入つた。社會をはなれてわしは生きて行けぬ。人間はわしをゆるすかも知れぬ。だが社會はわしを赦さぬ。

N 子 左様なら！ 私は行かう。もう此處には何も残つてはゐない。

少年 姉さん行かないで。行かないで。

N 子 私は行く。行かねばならぬ。事業が私を待つて居る。左様なら、みなさん。

令嬢 あなたは行きますか。私はもうあなたを止める勇氣がない。此處で——私たちの側であなは不幸だつたでせう。私はそれが悲しい。私はあなたを引き止めたのだから——でも許



して下さい。私はあなたを私の側に置きたかつた。あなたと別れたくなかつた。

N子 わたしも別れたくない。でも私は行かねばならぬ。何ものかが私に命じます。私は此處を掻き亂しました。あなたの明るい世界を泥足でふみ汚しました。——許して下さい。

令嬢 あなたは私の眠りをゆすぶつてくれた。あなたは苦惱の息を吐いた。熱風があなたと共に來て、私の家のなかで吹いた。それは私たちの安心した生活には強い刺戟だつた。あなたに反感を持つものもそれは感謝せねばならぬ。あなたは私たちに要求した。生きることの苦しみにもつと關はりを持つことを。あなたは要求した。社會の不正義をもつと烈しく憎むことを——私たちの内誰も感じないものはありますまい。もつとなやんで、決心して生きねばならぬと言ふことを——

博士 わしは抗議する。お前たちのやり方は充分に正しくはなかつた。時も處も得て居なかつた。不用意と粗野、そして無智——（令嬢に）わしは言ふ、お前の態度は今晚決して、ふさはしくはなかつた。令嬢らしくはなかつた。

令嬢 私はN子さんのために訴へたのです。N子さんのなやみが私の立腹に代はつたのです。

私のしたことは禮儀にかなはなかつたかも知れません。ですが禮儀は正義よりも重いものですか？ 罪惡は無作法よりも軽いものですか？ 此處に害を受けて惱んで居る人間がある。

そして誰もその人のために悲しんでやらないとしたら？ 誰がその人のために訴へてやるのですか？ 告訴者は確かにゼントルではありません。ですが愛と憎みはカルチュアよりも重

い——

青羽年 罪人の告訴者が同時に教誨者であることが出来るか？ 衆人の前で恥を與へたものが其の人に悔い改めをすゝめることができるか？ 僕は問ふ——僕は先生を辯護する！

令嬢 ………

N子 冷淡な！ 被害者でないものが、被害者と悲しみを領けないものが告訴者の心理を理解することが出来るか？

博士（令嬢に）お前は少し出過ぎた。わしは今晚お前が幾分パリサイらしく見えたのが残念だ。



令嬢 (赤くなる。) 私はお父さんのために悲しみます。何故あなたはもつと悪をお憎みにならないのです？ 自分を清くなさらないのです？ 罪に汚れた手がまだ清まらない内にお握りになつてよろしいのですか？ 學問は——あなたの神聖な學問は悪人の保護によつて支へられねばならないのですか？ それは卑怯です。不名譽です。さあ、願ひしたことを茲で宣言して下さい！

金澤 いや、それには及びません。私は自分で處置します。私は寄附の申出を撤回します。皆さんの寛大によつて、私はまだ公式には名譽を無くせず居る。私はまだ社會に生きて行かれる。いやお嬢さん、御安心下さい。私は二度とお宅にはあがりません。これで失禮します。

(退場。)

(沈黙。)

博士 (ぐつたり椅子にかけける。) すべては苦々しい。あゝたまらなく不愉快だ！

青年 高い空氣が缺けてゐる。一番高いものが此處にはない！ その結果がかうなるのではな

いのか。憎みと裁きとが第一のものとして支配する世界では……

博士 祝福を——胸の透き通るやうな光を！

N子 もつと憎め！ もつと裁け！

青年 誰も赦してはならないのか。恵みはないのか。

N子 罰だ。——恵みではない。被害者が求めるのは。呪だ！ 祝福ではない。——虐たげら

れたものの訴へるのは。私は呪ふ無花果の樹を。春がめぐんでも實を結ぶな。建物の下には穴を？ 樹の根には斧を。街には火を——復讐だ。復讐だ！

青年 あなたの父をあはれめ。——復讐はもう充分ではないか。

N子 冷淡な——でなければ公平な (皮肉に笑ふ。) 裁判官さん！

青年 裁く者は他にあるのだ！

N子 左様なら！

令嬢 N子さん。お待ちなさい。私もあなたと一緒に行く。



博士 お前。

令嬢 私は決心しました。私は行きます。此處はもう私の育つ處ではありません！

家政母 あなた……あなた……

令嬢 今日まで私は育てて貰ひました、明日から、ですが、私は世界に出ねばなりません、荒い海へ、疾い嵐へ！ 私はあまり安らかに生きて來た。あまり美しく夢みて來た。私の魂は欲します。もつと辛い事實に衝きあたることを。もつと濁つた泥の中を涉ることを……

青年 考へて下さい！ あなたは間違へては居ないか？ 激情に足を浚はれるのではないか！

令嬢 私はもう決心しました。

青年 あなたの本分は何處にある？ あなたのエレメントは？ あなたは光りの使ではないのか。祝福の鴿ではないのか。これまであなたは僕にとつてさういふ者だつた。其處に居る時あなたは一番輝やかしい。あなたのたましひが麗はしく花咲く。其處から離れるときあなたは邪道に入るのでないか？ 自分の影を見失ふのでないか？

令嬢 いゝえ、私はいばらの道に入ります。悲しみの谷路に進むのです。それが邪道でムいまずつて？ 私の肌は破れて血が出るでせう。私は岩角で骨を挫くかも知れない。でもそれは天國へ通じる道ではないの？ 賢い人がそれを私たちに約束しませんでして？

青年 賢い人は憎みを教へましたか。裁きと復讐との道が天國に導きますか。

令嬢 でも焰と刃とを彼は投げました。反逆の魂を彼は吹き込みました。繩と鞭と呪ひと罰の掟を置きました。ソドムとゴモラよりまだ恐しく燃える街を――

N 子 燃える街を！

令嬢 「復讐は我れにあり、我れ必ず報いん」と。

青年 復讐は彼にある、人間にはない。

N 子 復讐は人間にある。彼にはない。いつ彼は手を下すのですか。いつ彼は高い見物席から下りて來るのですか？

令嬢 テレンシアかジャン・ダークか？ 私は久しく迷つて來た。薔薇の雨か硫黄の雨か――私



は今選ばねばならぬ!

N 子 古い、我々の合言葉を知らないのか? 「革命は薔薇の水では洗禮されない」と――

青年 自分の魂を失ふものは一生を失ふものだ!

令嬢 母の血が私の血管の中で眼醒めたやうだ。お母さん! あなたは榊の樹の下で何を夢みたのです? 無数の旗が林のやうに砲烟になびく戦陣に大衆を率ゐて進撃することではなかつたのですか? 剣をとつて正義の戦の先陣に立つことではなかつたのですか?

N 子 私たちのために立つて下さい!

青年 復讐のスピリットに憑かれるな!

令嬢 (一瞬間眼を閉じて立つ。彼女の女は心内の聲に耳傾くるものの如く見える。)

N 子 私達にいらつしやい! 私達は悦んで同志としてあなたを迎へる。虐げられてゐる我を助けてくれ。我々は生きた機械にされてゐる。あなたの姉妹を憐れめ。私達は淫賣婦にとられて行く。私の母も私も汚された――あなたはそれを脇見して坐つて空想に耽るのです

か? 祈禱集を編んでゐるのですか? 本を捨てて下さい。私達の仲間に来て下さい!

青年 目的はわかつてゐる。手段はどうだ? 暴力の不正を憎んで立つものが暴力を用ひようと言ふのか? 敵はパンを奪つた、だから我々は血を流さうと言ふのか?

N 子 空しい一日もない。一時間も! 百人の女が今日汚される。千人の母親の乳が今日止まる。萬人の娘が今日石婦になる!

青年 階級の壓制と人間の利己心とどつちが古いのだ? どつちが源なのだ? どつちが我々の本當の敵なのだ? 敵の正體を掴め!

N 子 階級が敵の正體だ!

青年 利己心が敵の正體だ!

N 子 私たちは鞭の下で感ずる。彼等は机の上で考へる。私たちは着物についた火を消さうとするのだ。彼等は川に向ふの火を見てゐる! 階級が敵だ! 私たちはしつかり掴んでゐる。私たちは砲火を集めよう。私たちの敵に。階級に!



令嬢 私は行く。

青年 あなたは行くのか？

令嬢 経験が私に缺けてゐる。未知の世界が私を惹く。私は行かねばなりません。二つの靈が私の心の内でたゞかふ。私は強い方に従はねばならぬ。それは生命の必然性です。

青年 愛はあなたを牽かぬのか。二人がなかの幸福は？ それは過ぎてしまつたのか？

令嬢 (なやましく) 過ぎてしまつたのか？ 永遠にそれは過ぎはせぬ！

青年 僕の側に止つて下さい！ あなたが僕に光りをくれる。僕があなたに力をあげる。窓の下で庭の上で私たちは幸福だ。日々は黄金のやうに二人に来る。

令嬢 (數瞬間夢見るやうに立つて居る。)

N子 私は行かう。事業が私を呼ぶ。事業は愛より強い。いや愛と一つだ。

令嬢 私を行かして下さい。愛は過ぎはせぬ。永遠に——それは私の魂の内で生きる。大きくなる。私たちの愛は眞理と結びついてゐた。眞理をまげて楽しむ愛ではなかつた。今眞理が

わたしを旅に驅る。人生の廣い旅に——

青年 眞理は僕の側にある——僕はあなたを沙漠にやりたくない。

令嬢 先づ荒野に行かねばなりません。彼のやうに——試みがわたしに要ります。其處で本當に人間であることを學ばねばならぬ。

青年 あゝ。僕は残念だ。僕にはあなたを止める力がないのか？僕は信じる。眞理の星は僕の道を照してゐることを。だが僕はまだそれを擱んでゐない。それが僕を無力にする。——あなたを失はねばならないのか。

令嬢 私には力が要る！今私は何よりそれが欲しい。力は何處から来る？経験から、苦惱から。私はそれを知りました。——

青年 (沈黙。) 私たちの道は別れた。僕はそれを承認する。

令嬢 あなたと別れて私は弱るでせう。私はそれを知つて居ます。でも私は行きませう。——私は今くだけではならぬ。



青年 もう止めない。運命が命じるのだ。

家政母 これが別れか？ 十五年間育てあげた私に此のやうにして別れが来るのか？ 私の娘—

—私の嫁……私はさう思つてゐた。（涙を拭く。）

令嬢 （家政母を抱く。） 許して下さい。あきらめて私をやつて下さい。大きなものが命じるのです。

青年 僕は力には服従する。力は嚴肅だ！

家政母 （憎みの眼を以て） 私が恐れた通りだつた。此の人は魔をつれて來た。そして天使を奪つて行くのだ。

N 子 私は奪つて行く。私は擱んでゐる。私は力を持つて居る！

青年 僕は奪はれた。（聲高く） だがよく覺えて置くがよい。あなたは決して此の人の魂を買つたのではないぞ！

N 子 覺えて置ませう。あなたが私よりも強くなるなら……

N 青年 力は神聖だ！

（敬虔なる沈黙。）

令嬢 わたしは慄へるやうだ。新しい感覺が私の身うちを貫く。未知の人生の旅がこれから初まるのだ！

博士 俺は止めぬ——俺は弱くはない。

令嬢 （ひざまづく。） 許して下さい。

博士 お前はさまようて行く——俺はさう思ふ。だがお前は止まるまい。人生は遠い——やつて見るがよい。お前が眞の自己を見出すまで——

（沈黙。）

博士 俺はお前に婦人の最高の教養を與へた。今俺はお前を人生に放つ。思ひのやうにするがよい。——俺の名を辱かしめな。

令嬢 誓つてお父さんのお名を辱かしめません。



博士 (瞑目。) お行き。

令嬢 私は行きます。……これからお淋しいでせう。

博士 (淋しき微笑。) 俺の身を氣遣ふのか？ 俺は安泰だ。誰よりも確かな世界に居る。神秘的な學問の塔の中で、まつたく安全で、お前たちのさまよひを見て居よう。

令嬢 では行きます。——左様なら。

博士 お待ち。(令嬢立ち止まる) 一言——お前が傷つき、破れたら俺の所へ歸つておいで。——行け。

令嬢 (涙ぐむ。) お大事に。——左様なら。

(N子と令嬢月光の中に出て行く。)

少年 僕も行く。一緒に姉さんについて行く。

(後を追はんとする。)

青年 待ち給へ！

少年 姉さんは行つた。姉さんは行つた。

青年 待ち給へ。君は一緒に行くべきではない。君には他の務めがある。君はお父さんの側に居ねばならぬ。誰がお父さんを守るのだ。彼の人たちは裁いた。我々は愛さう。誰が君のお父さんの靈魂を悪から守つてあげるのだ？ それは君の役だ。もつと尊い役だ！

少年 (泣く。) 可哀相なお父さん！ 僕はさつきお父さんが惨めに見えてならなかつた。

青年 僕たちのもつと高尚な事をしよう。もつと深い、内からの務めを——僕ははつきり知つた。彼の人たちのした事はまだ本當の道ではない。眞理はあの先きにある！ それを僕たちはやらう。

少年 さうだ。お父さんはまだ悔い改めてはゐない。罪を清めてはゐない。姉さんとお父さんとがあれきりになることはたまらないことだ。恐ろしいことだ。

青年 さうだ。君は姉さんとお父さんとの間を和らがせねばならぬ。その仲解者の役は君でなくて誰れにとまる！



少年 僕はお父さんにも姉さんにもあんなに愛されてゐる。それなのに二人は敵同志だ。僕は  
お父さんと姉さんとを抱き合はさせなくては！

青年 さうだ。それが君に與へられたつとめだ。それをやりたまへ。

少年 僕はやらう。お父さんの事が急に氣にかゝりだした。お母さんはどうしたか知ら？ 僕  
は家に歸つて見よう！

青年 さうし給へ。君はお父さんから離れるな。君は平和の使だ。鬼を守る童子のやうにお父  
さんに喰つついて居給へ。

少年 (走り去る。)

青年 (月あかりを走り去る少年の影を見送つて立つてゐる。)

博士 (ソファに深く、身を埋め、眼を閉ぢて居る。)

(沈黙。)

家政母 先生、悲しいことになりました。

博士 いや、起るべき事だつたのだ。(間。) あまり傷まぬがい。

家政母 あまりお氣の毒で。

博士 わしの事なら、わしは健勝だ。娘のことは氣にはかゝるがわしは落ちついて居れる。わ  
しには確乎たる世界がある。明日からまた仕事をはじめよう。(間。) 書齋に行つて少し静  
かにしてゐたい。(立ち上る。)

家政母 (頭を垂れ後に従ひ、博士と去る。)

青年 (ドアをのけヴェランダに出る。月光。沈黙。) 俺はまけた。奪はれた。俺は敗衄を承認する。

(間。) だが俺は信じる。眞理は俺のものだ。俺はきつとそれを掴む。俺は苦く敗れたが、未  
來は俺のものだ。俺はきつと勝つ。何故俺は敗れたか？ 其の原因はすでに捕へた。俺は決  
心して立つ。俺は靈魂の闘ひを始める。(間。月を仰ぐ。次第に肢體から力が抜け、くづれるやう  
にうづくまる。) 明日から俺の日は淋しい。俺のたましひは悲しみの鐘を撞く。あゝ。(面を  
掩ふ。彼の後姿は泣いてゐるものの如く見える。)



家政母

(非常に悲しい、喪のやうな面つきをして登場。しづかに青年に近づく。)

青年

(身を起こす。)

家政母

お前に悲しみの言葉を言はねばならぬ。お前の花嫁は失はれた。

青年

(沈黙。)

家政母

(急に強い憎悪を浮べる。) 私の花嫁は奪られた。敵をとつておくれ!

青年

(沈痛に) 俺たちはまた見えるだらう。靈魂の戦の野に! 新しいトロイに——其處で

俺は奪られた彼の女をとり返すだらう。眞實に、彼の女の魂を贖ふだらう。

——幕

(第一部をはり)

第二部



人物

供へた男。第一部の青年。

N子。

山川。労働運動指導者。

同志の女。第一部の令嬢。

金澤。

金子夫人。

N子の弟。

供へた人々。

盲目の兄弟。

アナーキスト。



鑛務課長及事務員。

鑛夫聯盟委員。

女將。

其他 男女労働者。

學生。

警官。

群衆等。

處。

T市及びF市附近。

### 第一場

労働寄宿舎の一室。 横手後ろに集會場の棟と高い竿が見える。背景は雜草の生えた原、その向ふに濁つた海、草原の一部を横ぎつて築港用の土砂を運ぶトロツコの線が遠くに見える。草原には月見草が咲き、材木などが轉ろがつて居る。T市の近郊のある港街の場末。

N子 パンが足りない。——此の月もまた。(帳簿を押しやる。)

同志の女 同志に病人があつた。それに仕事にあぶれたものが——

N子 會計はいつも缺損です。でも私たちは落膽はしない。道は何とかしてつく。これまでもさうだつた。

同志の女 彼の人に言はねばなりませんまい。

N子 (吐息をつく。) 彼の人に言はねばなりません。彼の人には顔をしかめはしない。黙々とし



てまた何處かへ金をつくりに出て行くでせう。

(沈黙。)

同志の女 パンは必要だ。パンを得なければならぬ。パンはそれ自身のためではない。精神を支へるため……ほんの少ししか要らない——私たちが生命をつなぐためには。それさへあれば生活は無限に豊富だ。空も、海も、花も——人間の愛撫も私たちのものだ。無邪氣な遊びも私たちのものだ。物を創る時間も私たちのものだ。だがパンがないとき生活がない。時間が  
ない。——鎖があるきり……その少しばかりのパンくづが——

N 子 それが鍵だ。魔法だ。人間の生活を金縛りにする——

同志の女 私にパンと水とだけ與へよ、そして私はツオイスの神に劣らない程幸福に生きて見せる——それはエピクロスばかりではない。みんなさうなんだ。貧の味を知つてゐるものは皆それを知つてゐる。それなのに誰かがそれを人間に拒むのだ。

N 子 階級が、ブルジョアが——

同志の女 必要は正義だ。必要はものを神聖にする。わたしはそれを知つた。わたしは悔やまれる。私はお召を着ねばよかつた。それも私に要らなくなつた。でも紡績が今の私たちに必要なに比べれば——私は紅茶を飲まねばよかつた。麥と鹽とが私たちの自由を……

N 子 パンは悔りを防ぐために要る——いのちを賣らないために……女では——女では操を……もう返りはしない。(顔を歪める。)

同志の女 私は此處に来てよかつた。私は私の人間を救つた。人間の痛苦を知らずに甘えてゐたら……それは空しい。今私は生きてゐる。苦しくても充ちてゐる。——私は翻譯の仕事をしてよう。(机に向ふ。)

N 子 あなたの仕事は五人の口を養つてゐる。

同志の女 ハンブルな人間の口を——一人が十円で……私の昔の羽織一枚で——砂を嚙むやうな翻譯もそれを思ふと力づく。

N 子 寄宿舎の臺所は却々苦しい。でも來月からもつと緊めませう。福麥にしたら——そして



味噌で……

(沈黙。)

郵便配達 (登場。労働新聞をはふり込んで去る。)

N 子 (とりあげて見る。) W 聯盟の連中が又あなたの攻撃をしてゐる。

同志の女 (新聞を受取り一寸見る。) 相變らずだ。私はあの人たちが大嫌ひです。

N 子 あなたの非難が癪にさはつたのでせう。

同志の女 私は幾度でも非難する。彼の人たちには精神がない。あの妥協的な、生温るい態度は私たちの恥です。あの規則書を見たらブルジョアが私たちを輕蔑するでせう。わたしそれが何より残念だ。

N 子 さうです。まるで労働者と資本家との間のブローカーだ。

同志の女 資本家に誓約書を出させる。爭議があつた時、直接に交渉したものは除名するのです  
つて――

N 子 資本家は彼の人たちを捕へて置きさへすればいい。それで彼の人たちが労働者を操縦してくれる。

同志の女 わたし彼の人たちがわたしたちの運動の盟主のやうな風に振舞ふことを許して置けません。

N 子 非難して下さい。假借なく。あなたの筆には力がある。わたしにはできない。

同志の女 わたしは文字であやつることを習つた。學校で。――十五六年間わたしのやつたことはおもにそれだつた。それで私の日々の生活ができてゐた。文學者になるために！ あゝ。あなたたちにはすまなかつた。

N 子 いゝえ。あなたのペンは鋭い武器です。それで私たちのためにたゞかつて下さい。

同志の女 せめてさうするのがつぐのひでせう。

(沈黙。)

女事務員 (青ざめた顔をして登場。)



同志の女 おや。休みですか、今日？

女事務員 早罷びけでかへつたのです。

同志の女 どうして？

女事務員 (沈黙。)

N 子 病氣ではないのですか。それだつたら遠慮なく臥やすんでゐらつしやい。

女事務員 いゝえ。

同志の女 顔色が悪い——何か心配が——

(此の時玄關に人の聲。女事務員のがれるやうに立つて玄關口に出る。二人面を見合はす。)

女事務員 (引き返す。N子に) あなたに面會の方……

N 子 (出て行く。すぐ動搖した様子で引き返す。) 弟です。弟がきました。

同志の女 ……

N 子 すつかり變つて。百姓のやうななりをして……それに母親をつれて來てるらしいのです。

同志の女 ともかくも……では。(立ちかける。)

N 子 いゝえ。外で逢ひませう。面倒なことになるかも知れません。(出て行く。)

(沈黙。)

女事務員 (行きかける。)

同志の女 ちよつと。(事務員かける。) あなた……何か起つて居るのでせう。

女事務員 ……

同志の女 どうも近頃あなたの様子が變だと思つてゐました。言つて下さい。かくさず……私

たちの間では——

女事務員 私、局に出るのがいやでく。

同志の女 どうしたのです。

女事務員 局長さんがしつこいのです。

同志の女 馬鹿な、はねつけてしまひなさい。



女事務員　でも後が色々――

同志の女　局をやめてしまひなさい。

女事務員　（溜息をつく。）　それだけならいゝのですが……

同志の女　（鋭く。）　あなたは握られて居ますね。

女事務員　（青ざめる。）　私は悪い事をしたのです。

同志の女　……

女事務員　（突然泣き出す。）　私には母があります。故郷に――小さい弟と二人で。私は仕送りせね

ばなりません。私の月給は三十五圓です。弟が二三ヶ月病氣しました。私は受持の帳簿の數字を加減しました。

同志の女　局長がそれを握つて――

女事務員　私は祕密の室に呼ばれました。……私は選ばねばなりません。刑務所か、それとも

同志の女　それで、あなたは？

女事務員　それでわたしは……（間。）　私今日ある處で局長に呼ばれました。それは場末の待合でした。……私に上げてかへりました。……でも明日までのうちに決めねばなりません。

同志の女　勿論あなたは――

女事務員　（投げ出すやうに）　私は身を賣りませう。外に道がありません。

同志の女　斷じてそれはいけません！

女事務員　誰が母や弟を養ふのです。悪い履歴がついたが最後誰が私を雇つてくれませう。どうして私は生きて行くのです。私にとつて今の位置はわるいものではありません。……それに私ばかりではありません。そんなことをしたものは――

同志の女　いけません！　何を言ふのです。あなたは恥を忘れたのですか。

女事務員　（泣く。）　恥を忘れたのですつて？　誰がわたしに……え、え、恥を忘れたんです。やつぱりさうにちがひはない。







すみません。私はぬすびとです。私を裁いて下さい、と――

同志の女 さうです。さうおつしやい。私たちはみんな聲をあはせてあなたを辯護する。誰れが此の人を×××××？ あなたがたが？ 大ぬす人のあなた方が？ あなた方こそ私たちのパンを盗むのだ！ 暴力でぬすむのだ――

女事務員 それから私は言ひませう。私を用心なさい。私はあなた方のポケットをねらふ。でも私は喰べられないから、私の小さな弟の薬がないから――私は私のをとり返すために盗むのだ。でも私は操は賣らなかつた！

同志の女 操は賣られてはならぬ。飢ゑても――殺されても……私たちのうち一人がそれを賣る時みんなの恥だ。「女」の恥だ。男たちは私たちを輕蔑する。いや、そればかりではない。人間性が――たましひがふみにじられる。

女事務員 仲居が戸をしめて行つた。「椅を取りなさい！」局長がかう言つた。「窮屈さうだから……私はずつとした。私より大きな、力のある魔がのしかゝつてくるやうな氣がし

て……だが今はもう何んでもない。何故私はあんなに恐れたんだらう。

同志の女 決心して居なかつたから――あなたのたましひが生きて居なかつたから。

女事務員 あの男の前に恐れる奴隷のやうに、眼をふせてはもう立つまい。明日は一人の獨立のむすめが、誰でもいやらしい男にするやうに、嫌惡の情を一ぱい浮べて彼の男の面を見てやらう。それから……でもそれからすぐに女囚として……

山川 (二人の會話の間にはいつて來て後ろに立つてゐたが) 刑務所へ行く必要はない。

同志の女

(山川の顔を見る。)

女事務員

山川 決心さへあれば充分だ。局長は自分の祕密のあらはれるのを恐れる。

女事務員 證據は何もありません。

同志の女 考へてやつて居るでせう。

山川 はゝゝゝ。平凡なその局長に勇氣はない。あなたは恐れずにはねつけばいい。覺悟



を見せればいゝ。すると彼の男はすぐに妥協的になる。俺のお前に言つたことは他人に言ふのではないぞ。お前のしたことは俺が見なかつたことにする。

同志の女 それつきりでせうか。

山川 さうです。たゞし彼の男は忘れはしません。――使つた金は辨償してもらはねばならぬと。

同志の女 それですむなら、私たちが働いてその金をつくればいゝ。

山川 なあにほつて置けばいゝ。局長が卑劣なまねをした罰だ。局長は自分で始末をつけます。自分の局からさういふものを出したことは落度になるから。見てゐなさい。局長はあなたがはねつけたら、今後却つてあなたを恐れるやうになるから。馬鹿な！ それ位なことが見ぬけずには澤山なむすめが身を賣るのだ。我々のむすめはもつと強くならねばならぬ。もつと鋭く。柔弱なことは名譽でない！

女事務員 私あの局はもうやめます。

山川 やめてどうするのです。

女事務員 他で口を探します。

山川 それには及ばない。知らぬ顔をして今の局にゐなさい。

女事務員 でもわたし……

同志の女 そんな局にゐる気がしないのは當然です。

山川 いや、同じことだ。何處へ行つてもまた同じやうなことが起る。あなた方は甘い。日常の茶飯事だ。今の社會のしきたりだ。一方に金と淫慾とがある。他方に飢ゑと美貌とがある。後は方程式だ。もつと事實の力を知れ。我々は此の公式を打ち毀はさねばならぬ。その個々の結果ではない。決心さへあれば何處でも身は守れる。それが無ければ何處へ行つても駄目だ。

女事務員 (沈黙。首を垂れて退場。)

同志の女 かういふ汚い祕密がどんなに多いのでせう。